
子供先生の親友～独走

鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供先生の親友〜独走

【Nコード】

N9377W

【作者名】

鈴鹿

【あらすじ】

子供先生の親友〜本伝から派生した別のお話。

これより前の話は、子供先生の親友〜本伝をお読み下さい。

ネギとは別の方法で生徒を見守るエリオ。

原作で巻き起こす騒動から生徒を救っていきます。

ネギ？ 騒動発生装置よりも生徒優先です。

課外1時間目『浅はかな企みと強かな対策』（前書き）

独走ルート1話目

課外1時間目『浅はかな企みと強かな対策』

新学期が始まって早々に近衛門に呼び出された。

「何か用でしょうか？」

「うむ。君には事前に伝えておこうと思ってな」

「また何か悪企みですか？」

「またとはひどいのう……」

図書館島の前科があるからな。

安全とか言いながら、禁書の管理ミスでのどかを危険にさらし、由梨絵を解放した。

忘れたとは言わせない。

「それで、今回はどんな悪企みですか？」

「悪企みではないんじゃないがのう……。お主のクラスのエヴァンジェリンは知っておるな？」

「今度は彼女を巻き込むつもりですか……」

「巻き込むとは人聞きが悪いのう。知つてのとおり彼女はこちら側じゃ、巻き込むのではなく協力してもらうんじゃないよ」

「それで？ 彼女に何をさせるつもりですか？」

「うむ、彼女にはネギ君と戦ってもらおうと思っておる」

なるほど、エヴァンジェリンは元高額賞金首。

英雄の息子であるネギと戦わせ、本物の魔法使いの力を見せるつもりか。

大方、影から戦いに介入してネギに箔付けをさせるつもりだろう。

「それで？ 俺にどうしろと」

まあ、大体言いたいことはわかってるけどね。

「お主にはネギ君とエヴァの戦いに干渉もしくはネギ君に協力を……」

「お断りです」

「ふお！？ ダメかのう？ 万が一、ネギ君が暴走した際のストツパー役にもなつて欲しいんじゃないが。エヴァを助けることにも繋がるのじゃが」

「そんな危険があるなら、初めから戦わせないで下さい。もし、その万が一が起きたら、俺は教師として生徒の安全のために、ネギを排除しますよ？」

「だ、大丈夫じゃよ。常時監視もつけるので。お主にはぜひとも監視役に」

「はあ…… わかりました」

「おお、わかってくれたか！」

やけに喜んでますね。

俺が学園長の思惑通りに動くとしても？

「ええ、エヴァンジェリンを守るために彼女側でネギの監視役をさせていただきます」

「ふお？ ネギ君の傍ではダメなのかのう？」

「俺が守るべきはネギではなく、エヴァンジェリンです。学園長の聡明な頭脳で考えられた計画ならネギは安全なんでしょう？ 俺が守る意味ないじゃないですか」

「ぐ……」

「それが嫌なら、こんな馬鹿な真似はやめてください。なんなら、代わりにネギを止めますけど？」

生徒とネギなら天秤に掛けるまでもなく生徒優先だ。

「わ、わかった。それで構わん。ただくれぐれもワシらの邪魔はせんでくれよ?」

「生徒に危害を加えないのなら」

「もちろんじゃとも」

ほい、言質取得。

これで、キティに何かしようとすればネギを止められる。

学園長はキティのことを生徒だと思っ てないみたいだ。

キティだつて3・Aの一員以上、俺の受け持っている生徒だ。

ネギがキティを傷つけたときは、覚悟してもらおう。

生徒に手を出すなどいろんな意味で言語道断だ。

近衛門は俺が了承したこと で安堵したのか、にこやかに俺を見送った。

課外2時間目『吸血鬼の噂と天秤を壊す者』（前書き）

今回は直前の振りです。

吸血鬼の噂の再発、そしてネギの行動とエリオの考えを少し書きました。

よく考えたら、起きる出来事は同じでも、結末やそれに至る道筋は独走と成長でぜんぜん違うのだから独走も遠慮することないかな？

メッセージであつた質問ですが、どちらのルートも初期従者^{ヒロイン}は共通しています。

それ以外の皆さんに従者推薦されたキャラは、成長か独走のどちらか片方でしか従者になりません。

一部例外（作者のお気に入りだけど、初期メンバーに含まれなかったキャラ）は別ですが。

なお、推薦されたからといって必ずしも従者になるわけではないし、戦力バランス上の問題でエリオ以外の従者になることもありえますので、その辺りはご了承ください。

今後従者を推薦するなら、どちらのルートで誰の従者にして欲しいか書いてくださると、作者も採用しやすくなり助かります。

すでに従者候補は大体決まっていますが、今ならまだ入れ替えや今後の話の修正が可能ですので、ご希望の方はお急ぎください。

なお、魔法世界の住人でもOKです。

従者にならないオリジナルキャラだって出てきますから、そのキャラが気に入ったならそれでも構いませんし、『完全なる世界』側のキャラでも構いません。

原作の時系列？ なにそれ？ 美味しいの？

課外2時間目『吸血鬼の噂と天秤を壊す者』

近衛門に呼び出されてから数日。

3学期の時と同じ『桜通りの吸血鬼』の噂が流れ始めた。

近右衛門に頼まれたキティが行動を始めたのだろっ。

吸血鬼とは、現実ならオカルトの類で済むが魔法使いなら話は別だ。今のところ、こちらではキティしか確認されていないが、他にいないとも限らない。

それに魔法世界の住人にとって『闇の福音』と言えば、高額賞金首であり、夜更かしをする子供に『夜更かしをする悪い子は闇の福音が攫いに来る』と言い、子供を寝かしつける方便に使われる。

もちろん、そんなことはないがそれほど恐れられている。

おかげで、吸血鬼「悪者」と思い込む輩が多い。

初めから悪の生き物なんていないのに……

「せんせー出席はー？」

「ああ。悪い。出席を取るぞ。朝倉」

風香に促されて、出席確認を始めた。

今日もネギが遅刻して新田先生にお説教を喰らっているの、代わりにHRを行っている。

まったく、もう注意する気も起きない。

というか、新田先生にお説教を頼んだのは俺だ。

新田先生は、HRがあるから説教は放課後にまわそうとしたが、俺がそれを引き受けてその場でお説教してもらったようにした。

時間が経てば、ネギは忘れそうだし、反省の色も薄いだろう。怒るならすぐに怒った方がいい。

前ならば「後でもいいか」と流していたかもしれない。

やはり、今までの俺はネギを甘やかしていたのかもしれないな。ま

だ数年の付き合いとは言え、親友として時間を過ごしたし、知らず知らずの内に子供だからと色眼鏡を掛けて見ていたのかもしれない。今後はもっと厳しくいこう。

それがネギのためであり、ひいてはネギに教わる生徒のためになるだろう。

「レイニーデイ」

すつと手を上げて存在をアピールした。

うん。欠席はなしだな。

出席簿を閉じて、連絡事項を伝え始めた。

「最後に、桜通りで不審者による被害が多発している。暗くなる前に寮へ帰るか、遠回りでも人通りの多い明るい場所を通って帰るように。以上でHRを終わる」

不審者と言ったところで、キティに睨まれた。

不審者扱いが気に食わなかったのか？

けど、吸血鬼云々を言うわけにはいかない。

吸血鬼と言うのはあくまで生徒間の根も葉もない噂であり、教師がそれを肯定してはならないからだ。

生徒は口々に不審者は吸血鬼だ。いや宇宙人だ。などと騒いでいる。連絡はさっきの話で終わりだから外に漏れるほど大きくなければ放置する。

「エリオット、遅れてごめん！」

「俺以外にも謝るべき相手がいるだろうが」

「そうだった。皆さん！遅れてすいません！」

HRが終わったところで、ネギが教室に駆け込んできた。

まったく、こんなのがキティと戦うのか……
果たして勝つことが出来るのやら。

「エリオット、後で少し話があるんだけどいい？」

ネギが小声で話しかけてきた。

「なんだ？ ココでは話せないようなことか？」
「うん。魔法関係だと思う」

魔法関係。おそらく、近右衛門が仕組んだ噂についてだろう。

「……わかった。放課後でいいか？」
「うん」

放課後に待ち合わせを約束して、俺は教室から出て行った。
その後ろで、ネギは生徒達に遅れたことをからかわれながら授業を始めた。

——放課後

「それで、話って？」

前の吸血鬼事件の時と同じように空き教室に入って防音・人払いの結果を張ってネギに問いかけた。

「エリオットは桜通りの噂知ってる？」

やはりその話か。

「ああ、知っている。不審者が出るって話だろ」

「うん。その噂前にもあったよね」

「あったな」

「あの犯人って何者だったの？」

ネギには、キティの正体を教えていない。

前の噂の犯人は、俺が捕まえて近右衛門に引き渡したということになっている。

だからネギは犯人の顔も名前も目的も知らない。

もちろん、原因の半分が自分の父親のせいであり、狙いが自分自身だったこともだ。

「不法に侵入した魔法使いだった」

「そうなんだ。そいつはエリオが捕まえたんだよね？」

「ああ、俺が捕まえて学園長に引き渡した。一体何が言いたいんだ？」

「そいつがまた戻ってきたのかと思って……」

「そこまでは知らない。引き渡した後の話は学園長に聞いてくれ。万が一護送中に逃がしたなら可能性もなくはないが…… お前は、せつかく逃げ出したのに捕まった場所にすぐに戻るか？」

まあ、そんな可能性皆無なんだけどな。

犯人であるキティはずっとこの学園に居るし。

もっとも、近右衛門の依頼以外でネギを襲う理由はないだろうけど。

「そ、そうだよな。だとすると、今回の噂の犯人は何者だろう……」

「噂の犯人も何も、今回の不審者の犯行だろう？ 前の時は佐々木から魔法の気配を感じたから魔法使いの可能性があるってだけで、そうそう魔法使いが犯人とは限らないだろう。魔法使いなんてこの世界には一握りしか居ないんだぞ？」

「それは知ってるけど、実は今日遅刻したのはそれを調べてたからなんだ。新田先生は魔法関係者じゃないからただの寝坊だって言っただけだ」

それで遅刻したのか。

そういうことは教師の仕事に影響が出ないように調べるべきだろうに。

「調べるのはいいが、そういうことは今みたいな放課後とか早起きしてやれ！」

ネギの頭に拳骨を落とす。

相変わらず障壁を張りっぱなしなので、わざわざ障壁突破までつけて殴った。

「うっ、痛い」

「時間はいくらでもあるだろう。自分の受け持ちがない時に抜け出すなりなんなり出来るだろう。教師の仕事は生徒を教え導くことだ。例えば、生徒に被害が出たとしても、俺達は生徒を守らないといけない」

「それじゃあ、被害にあった子はどうするのさ！ 見捨てるの!？」
「捨てることで他の生徒を守れるならな」

この手で救える存在なんて極わずかだ。自分の周りすら満足に守ることも出来ない。

そんなこと、今まで何度となくあった。大事な1を捨てて周り9を

救うか、周りの9を捨てて大事な1を救うという選択なら。俺は迷わ後者を選ぶ。

だが大事な1と大事な9なら俺は……もし、たった一人の犠牲でその他大勢が助かるなら。俺は躊躇なく捨てる。

「……僕は、そんなことしない！ 誰も犠牲になんかさせない！」
「そうか」

「今回は僕が何とかする。エリオットの力なんて借りない！」

ネギは顔を真っ赤にして空き教室から出て行った。

「若いな」

誰も居ない空き教室でぽつりと漏らした。

俺ももう覚えていない昔なら、全てを救おうとしたかもしれない。

だが、そう都合よくはいかない。

どれだけ力があるうと、どれだけ知識があるうと、この手で守れる数は決まっている。

だから、俺はもしも大事な1と大事な9を天秤に掛けるなら、その天秤を壊す。

誰が1を捨てると決める？ 誰が9を捨てると決める？

それは計りに掛ける10に含まれない1（俺）。

ならば、その1を捨てることで10を守る。11の中から10を守り、1を捨てる。

全ては救えない。全ては守れない。だから俺を捨てる。

全て（11）の中から1を捨てなければならぬのだから、すべてを救うなど不可能だ。

だが、そうすることで俺以外を見捨てずに済むのなら、俺は躊躇なく捨てる。

ただ、誰かを見捨てると言う選択をしないために俺を捨てる。

それで少しでも多く大事な者を救えるのなら構わない。

例え、見捨てて相手の命が残りわずかでも、大事なものを見捨てずに済むのなら喜んで犠牲になる。

コレが自己満足に過ぎないことくらいわかっている。

中には自分を見捨てて生きると願うものも居た。それでも俺は大事なものを見捨ててなどしたくない。

大事なものを計りに掛けるなどできない。

それに、どうせ消えられない身だ。

消えて本望、消えずとも誰かを救って死ねるなら、あれほど嫌った転生も少しは好きになれるかもしれない。

課外2時間目『吸血鬼の噂と天秤を壊す者』（後書き）

エリオ君は自己犠牲の塊です。

のどかの時も、助かるなら自分を犠牲にしようとしてましたしね。

大事なものを選べないって、ある意味優柔不断になるのかな？

まあ、そこらに溢れている優柔不断とは格が違うんですけどね。

何度も何度も死んでいれば、死ぬことに意味を見出すそうとするだろうと考えた結果こうなりました。

『無駄死に』という言葉があるように『意味のある死』と言うのもあると、私は思っています。

それは個人個人によって違い、見る人が見れば無駄死にかもしれません。

ですが、何かを捨てなければならぬ状況で自分以外の全てを拾うなら、こう言う方法もあると思いました。

自分を捨てることが前提で、他に捨てるものを選ばなければならぬ時は、大事な者以外を犠牲にします。

大事な者と言ったって、それが世界の全てではありませんから。

あくまでエリオの中での大事な者を捨てる場合の1・9の選択であって、周りにどうでもいい者がいるなら守るために使います。

もちろん犠牲が少ないに越したことはないので、第一の犠牲者がエリオ自身なのは確定ですが……

生きることの意味を見つけるのではなく死ぬことに意味を見つけるのがエリオなのかもしれません。

課外3時間目『吸血鬼の正体と戦いの裏側』（前書き）

今回はネギVSエヴァの1戦目です。

そしてその裏でひっそり（？）と活動するエリオの活躍（？）をご
覧下さい。

課外3時間目『吸血鬼の正体と戦いの裏側』

その日の晩

またしても教師の仕事（書類仕事）を放り出して行方をくらませた。
……キレてもいいよな？

これで何回目だ？ 何回注意した？ もう注意する気も起きない。
中には急ぎの書類もあり、運悪く俺でも書けるモノだったせいで、
新田先生に頼まれて変わりに書いた。

まさか新田先生も注意した傍から逃げられるとは思っていなかった
らしく、かなり呆れていた。

明日学校に来た時には、新田先生の雷が落ちるだろう。

問題のネギは、桜通りでキティの襲撃に備えてるんだろうな。

一応、様子見だけはしておくか。

もしもネギがキティに攻撃魔法を撃つなら介入もやむなしだ。

生徒の目があるから純粹に身体能力のみで急ぐ。

人目が無いなら瞬動を使った方が早いんだけどな……

「でコレはどういう状況だ？」

つい独り言が漏れた。

気を失っている様に見える木乃香を抱いているキティと相変わらず
悪目立ちする杖を持った私服のネギ。

ネギの奴……仕事から逃げただけじゃなく、わざわざ部屋に戻って
着替えたのか！

「アナタが噂の犯人ですね。木乃香さんを放して下さい！」

「ふん。欲しければ力づくで取り返してみるのがいい！」

「わかりました。僕の生徒を返してもらいます！『ラス・テル・マ・ステル・マギステル。風の精霊11柱。縛鎖となりて、敵を捕らえよ。《魔法の射手・戒めの風矢》』」

「ふん。この程度か。《氷遁》」

キティは何かが入ったフラスコを投げた。おそらく、使い捨ての簡易触媒だろう。

キティの目の前に氷の楯が現れ、ネギの放った戒めの風矢を防いだ。しかし、風の勢いが強く、帽子が飛ばされた。

「くっ！ 父親譲りの馬鹿魔力か！」

「あなたはウチのクラスのエヴァンジェリンさん！？ な、何者なんですかあなたは？。僕と同じ魔法使いのなのはどうしてこんなことを！？ それに父親譲りって…… 父さんのこと知ってるんですか？」

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ！」

『《氷結・武装解除》』

キティが試験管とフラスコをネギに投げつけた。

父親云々はスルーか。

ま、父親の話題はネギを食いつかせるための罠だろう。

「うわっ！？」

避け損ねたネギの服に掛かると、凍って砕けた。

「くっそう！ こっちだつて！『ラス・テル・マ・ステル・マギステル。《風花・武装解除》』」

「ふん。みえみえだ！」

ネギの放った武装解除に木乃香を投げて当てる。
武装解除は身に着けているものを吹き飛ばす魔法で人体に一切被害は無い。

コレが攻撃魔法ならんでもないことになっていたな。

木乃香が人質にとられるとは考えないのか!?

まあ、それ以前に攻撃魔法を放った時点で止めるがな。

「うわ!？」

裸になった木乃香から目を逸らす。その間に木乃香が地面に落ちた。目を逸らすくらいなら受け止めに行けよ……

にしても、あのくらいの衝撃じゃ目を覚まさないところを見ると、魔法で眠らされている可能性が高そうだ。

「ネギー」

ネギの後ろの方から明日菜が走ってきた。

「ちつ。邪魔が入ったか」

キティは明日菜が来ることに気付き、踵を返して逃げ出した。

明日菜が認識者だと知っているのは、俺とネギ、あとは近右衛門とタカミチくらいだろう。

キティでも秘匿には気を使うんだな。ネギも見習って欲しい。

「ネギ! あんた木乃香に何したの!？」

「ぼ、僕じゃありません。僕は木乃香さんを助けたんです!」

「助けたって、木乃香裸じゃない!」

「あつ、それは…… と、とにかく、木乃香さんをお願いします! 僕は犯人を追いますから」

「あ、ちょっと！」

ネギは言い訳が苦しくなったのか、明日菜に木乃香を任せて、明日菜の静止を振り切りキティの後を追って走り出した。

明日菜はネギを追いかけようとするが、裸の木乃香を放っておくわけにもいかず、どうしようか悩んでいる。

悩む前に、何か着せてやれよ。春先とは言えまだ寒いから風邪引くぞ。

「おい、神楽坂。ここで何をしている！」

「え、エリオ！？」

しょうがないので今来た風に装って声を掛けた。

「あんた、こんなところで何をしてるのよ！」

「見回りに決まっているだろう。朝のHRでも言ったよな？ 不審者が出るから桜通りを避けるか暗くなる前に帰って！」

「そういえば……」

「それでもお前みたいな人の話を聞かないバカがいるから、そういうバカを不審者から守るために定期的に見回りをしているんだ。何か問題あるか？」

「ちよつと、人のことをバカ呼ばわり……」

「じゃあ、どうしてこんなところに居るんだ？ 俺の話をきちんと聞いているなら、この場所には居ないはずだが？」

「う、それは……」

「まあ、いい。それで、近衛もそのバカの一員か。しかも裸だし…… まさか、神楽坂お前、そういう趣味なのか？ 余り人の趣味を

とやかく言う気は無いが無理やりはダメだぞ。あと非生産的だから俺はその道を勧めないぞ？ 合意があるなら、黙認はしてやるがあまり公衆の面前では……」

「違つわよ!」

「なら、なんで裸の木乃香をお前が抱きかかえてるんだ? しかも、不審者騒動で人通りの少ないこの場所で!」

「うっ……」

さて、明日菜をいじめるのはこのくらいにして、スーツの上着を脱いで明日菜に投げ渡した。

「何?」

「木乃香に着せてやれ。そのままだと風邪を引くだろうし、裸で寮まで連れて行くわけにもいかないだろう」

「あ、うん。ありがとう」

「気にするな。じゃあ、さっさと帰れよ」

「あ、待つて!」

「なんだ?」

「私まだ用事があるから木乃香のこと頼めない?」

「俺、一応男なんだけど」

「エリオならネギと違って変なことしないでしょ?」

ネギ…… お前、何やってるんだ?

答えを聞く前に、この件を詳しく聞かないといけないな。

そして、用事って言うのはおそらく、ネギを追いかけるつもりなんだろうな。

「友人を放っていくほどの用事なのか?」

「それは……」

「まあいい。今日のところは引き受けよう。だが、忘れるなよ。いずれどちらかを選ばなければならぬ時が来るぞ。黄昏の嬢ちゃん」

「え?」

「ああ、鍵が掛かってるなら鍵くれ」

「あ、うん。ところで今」

「ん？」

「うっん。なんでもない。それじゃ木乃香お願いね。鍵はポストに入れていて」

「ああ。わかった」

鍵を受け取ると、明日菜はキティが逃げた方に走って行った。

俺は魔力で強化して木乃香を背負って、寮まで戻った。幸い、誰にも見つからずに済んだ。

鍵を開けて木乃香をベットに寝かせる。

さすがに着替えさせるわけにはいかないしな…… 念のため、魔法で異常が無いか確認しておく。

『アルトピア・ベール・ドウ・アンナ。生き物に宿りし生命の精霊よ。彼の者の異常あらば我に知らせよ。我は異常を治す者なり。』
《生体走査》

木乃香の額に触れて呪文を唱えた。これで木乃香の状態がわかる。

『強制睡眠：残り1時間』

ふむ、眠っているのは魔法による強制睡眠で、相当の痛みを与えない限り、魔法が効いている間は起きないのか。

効果時間は……あと1時間くらいか。

他には特に……！？

おいおいおい！ キティの奴何をやってくれてんだよ！

異常の中にとんでもない異常があった。

『半吸血鬼化：潜伏中』

キティの奴、木乃香を吸血しやがったな！

木乃香は元々魔力の容量が大きかったおかげで、精神操作は抵抗したようだが、半吸血鬼化までは防げなかったようだ。

半吸血鬼化なら吸血を受けない限り時間経過で抜けるが、半吸血鬼化状態でかまれ続ければ抵抗力が徐々に落ちて、精神操作に抵抗できなくなる。

さすがに木乃香を吸血鬼化させる気じゃないとは思うけど……

しかし、キティには少し O H A N A S I する必要があるそうだな。

部屋に鍵を掛けて寮を出る前にポストに鍵を入れておく。

さてと、キティの家に家庭訪問と行きますか。

課外3時間目『吸血鬼の正体と戦いの裏側』（後書き）

今回は、エヴァとO H A N A S Iします。

エリオの説教に真祖の幼女吸血鬼は果たして耐えられるのか？

…… 本当にこんな話書くのか？

課外4時間目『学園長の悪企みとO H A N A S I』（前書き）

今回は拷も…じゃなくて、尋も…でもなく、O H A N A S
Iタイム！

課外4時間目『学園長の悪企みとO H A N A S I』

途中で少し寄り道をしてからキティのログハウスを訪ねたが、まだ帰ってきていないのか暗いままだ。

しかたがないので、買い物袋片手に入り口のところで待ち構える。しばらく待つと、明かりのない道から声が聞こえた。

「他愛もない。あの程度で英雄の息子とはな。まったく爺もとんだ依頼をしてくれたものだ」

どうやら帰ってきたようだ。

それじゃ、O H A N A S I開始だ。

「マスター、家の前に」

『魔法の射手』《束縛の闇矢》』

俺から放たれた闇矢に拘束され、その場に転がるキティ。

近づいてみると、キティは下着姿だが今は無視する。

茶々丸はそれを見るや否や臨戦態勢をとり、キティの前に立ちはだかった。

「よう。キティ」

「その名で呼ぶな！いきなりこんなことをして一体どういうつもりだ」

「何、ちょっとO H A N A S Iする必要がありそうなんで、逃げられる前に捕まえさせてもらった」

「なぜだ！何か気に触るようなことをしたか？」

「なぜ、近衛を噛んで半吸血鬼化させた？吸血するだけなら半吸血鬼化させる必要はないだろう？」

それを聞いたキティは驚いていた。

まあ、潜伏中の半吸血鬼化を知る方法はまだ見つかっていないからな。

見つかっていないだけであるんだがな。俺の生体走査とか。

「それは……」

「それは？」

「ふん！ 誰が言うものか！ 対価なしで何でも思い通りになると思っちなよ？ 聞きたいなら相応の……」

そうかそうか。それじゃあ仕方ないな。

中身が600歳とは言え、見た目幼女を拷も……尋も……するのは趣味じゃないんだけどな。

「『影操術《影縫い》』わかった。なら自発的に話したくなるようにするしかないな」

茶々丸の影に、袖の影から出した針を当てて身動きを封じる。

動こうと必死な茶々丸を無視してキティの前に立つ。

そして、ここに来るまでに寄り道して買って来た長ネギを買い物袋から取り出して、キティの首にぺたぺたと当てる。

「ひい！ 葱！？」

「代価だあ？ ずいぶんボケたことを言うなあおい。別にネギが襲われようが俺にはどうでもいい。だがな、生徒に手を出すのはいただけない。まだ『ただの吸血』程度なら、まだ我慢の余地はあったんだがな…… その拳句に、理由を知りたければ対価をよこせ？ これをふざけていると言わずして、なんて言えばいいんだろうな？」

今の俺はものすごく笑顔だろう。
怒りを通り越して激怒しているからな。笑顔とは、本来攻撃的なものだ。

だから今の俺は笑顔だ。それを見たキティは涙目で怯えている。

「さて、どうしようか？ 鼻にでも挿すか？ それともニンニクと一緒に風呂で煮るか？ 尻に挿すのは風邪の時だっけ？ とりあえず、魔力の封印は確定だな」

パチンと指を鳴らして、無詠唱でキティの魔力を封印する。

これでキティの魔力は、以前の歪んだ登校地獄の時並に減少した。キティ自身もそれがわかったのか、顔が青い。それはそうだろう。これからネギと戦わなければならないというのに魔力を最弱状態で制限されたんだから。

いくら『闇の福音』と言えど、魔力なしで魔法戦をするのは無理だからな。

「さて、それじゃあ、O H A N A S Iを始めようか。『《浮遊》』」

さすがにここで悲鳴を上げられると近所きんぱうに迷惑だ。簀巻き状態のキティを浮かせて、ログハウスまで運ぼうとした。

「お待ちください」

「ん？」

いつの間にか影縫いを解いた茶々丸が、行く手を遮るように立ちはだかった。

所々煙を出しているところを見ると、負荷のかけすぎでショートしたか？

まったく、無茶をする。

生身で無理やり解いたら四肢に障害が残ってもおかしくないぞ。

「そんな体で邪魔する気か？」

「はい。マスターを放して下さい」

「それは無理な提案だ。聞かなきゃいけないことがあるからな。安心しろ。傷は負わせるつもりはない」

肉体的には……な。精神的には……キティの心がけ次第だな。

「先生は近衛さんを半吸血鬼化させようとした理由が、お聞きになりたいのですよね？」

「そうだ」

「それは、私からお話します」

「カラクリがかわりに話すから、キティを解放しろと？」

「はい。マスターは一度言った手前、そう簡単に教えることはないでしょう。でしたら、私から聞いたほうが早いと思いますか？」

「……いいだろう。ただし、魔力封印はこのままだ。どんな理由にしろ。一般人である近衛を巻き込んだことに変わりはないからな。罰だ」

「わかりました。寛大な措置に感謝します」

丁寧にお辞儀された。

いや、そこまでされるほどのことでもないんだが？

「おい茶々丸！ 何を勝手に！ 大体、近衛が一般人だと？ 奴は爺の孫で関西の長の娘だぞ？ それのどこが……」

「マスターは黙っていて下さい」

まったく600年も生きて空気を読む方法を知らないのか？

俺は呆れながらキティに返した。

「オマケに大戦英雄『紅き翼』の一員が親なんだろ？ だからなんだ？ 彼女自身はただの女子中学生だ。親がなんだろうが関係ない。今はまだ魔法を知らない一般人で、これから先知るかどうかなんてわからないだろうが！ このまま知らずに死ぬかもしれないし、知ってしまいかもしれない。だが、知るのは魔法に巻き込まれた後だ。他の奴の事情ならまだしも、こんなくだらないことで必要もないのに巻き込むな！」

「ふん。私が何の意味もなく吸血すると思うか？」

「どういうことだ」

「詳しい話は茶々丸に聞くんだな。もう私は絶対に喋らんぞ！」

キティは頬を膨らませて、顔を背けた。

もうキティから聞かなくてもわかるんだから、聞けなくてもどうでもいい。

「それで茶々丸。近衛が半吸血鬼化させられる理由とやらを教えてください」

「はい。学園長からの依頼です」

「学園長から？」

「はい。マスターに依頼されたことは2つ。1つはネギ先生と戦うこと。もう一つは、その事件に近衛さんを巻き込むことです……」

「つつ！？」

「つつ！？」

……なるほど。今回の事件を通して魔法に少しでも触れさせるつもりだったわけか。

自分の孫を危険な世界に放り込もうなんていい性格してるなあ。それが孫にすることか？

魔法の存在を教え選ばせるでもなく、事件に巻き込んで強制的に魔法を教えるつもりなんだろうな。

今後こんな事件が起こらないとも限らないし、いつでも守れるわけじゃないから力を身につけなければいけない。とかなんとか言うつもりなのかねえ？

「く、あははははははは」

「エリオ先生？」

「キユウ……」

「クソ爺が！ 俺の生徒をくだらない政治の道具に仕立て上げるつもりか。大方、最終的にはネギとくつつけて英雄の娘・息子のコンビで魔法世界に売り込もうってか？ほんと、いい性格してやがるなあ」

今すぐ殺してやるつかクソジジイめ……

いや、アレでも近衛の祖父だ。俺が手を出すのは筋違いか。

「エリオ先生。魔力を抑えて下さい。急激な周辺魔力の増加に、マスターが気絶しています」

「む？」

浮遊で空中に浮いているキティが気絶していた。

「すまない」

茶々丸に素直に頭を下げて、拘束を解いた。

そのまま、茶々丸に渡そうとしたところで、気付いた。そういえば、あちこちショートしていたな。

「茶々丸。体の方は大丈夫か？ 影縫いから抜け出すのに無理をし

たようだが」

「戦闘行動はできませんが、日常行動に問題はありません。少々焦げ臭いかもししれませんが……」

「生身なら治してやれるんだがな」

「私には治癒魔法は効かないので無理です」

「せめてもの侘びだ。ベットまで運ぼう。どうせ、今日は起きないだろう」

「お心遣い感謝します」

「元はといえば俺がやったことだ。気にするな」

「……はい」

「茶々丸も歩くのがきついなら運ぶが？」

「問題ありません」

そう言つて俺の隣に並んでログハウスに入った。

「キティの部屋は？」

「ご案内します」

茶々丸にキティの部屋に案内してもらい、ベットに放り込んできた。そんなに魔力放出したかな？

一向に起きる気配がない。あ、魔力封じた状態だったから普段よりきつかったのか。

まあ、これも罰の1つにしておこう。

放り込んだ後は、茶々丸から詳しい話を聞くためにリビングで向かい合つて座っている。

俺の前には、茶々丸が淹れてくれた紅茶がある。

美味しかったので、おかわりしてしまった。これで2杯目だ。

「それで？ 詳しい話を聞こうか」

「はい」

茶々丸の話を聞いて、胸糞悪くなった。

魔力の放出をする前に、茶々丸に止められたので今度は魔力を放出していない。

まとめると、ネギには戦闘経験を積ませ、木乃香には魔法に触れさせ危険性を教えた上で自衛の手段として魔法を習わせるらしい。

申し訳程度に、他の生徒を事件に巻き込むのは教師として容認できないとか言っていたらしいが、だからと言って自分の孫をそんなくくだらないことに使っていない理由にはならない。

「これが私の知る限りの情報です。学園長室に居る間、念話を使った痕跡は見受けられないので、密談はないと思います」

「わかった。それで、お前達はこれからどう動くつもりだ？」

「私はマスターの命令に従うだけです。マスターはおそらく続行するのではないかと……」

「そうか。なら、キティが起きたら伝えておいてくれ。ネギをどうこうする分には俺は一切口出ししない。また、自分から進んで魔法に関わってくる生徒に関しては、後遺症や傷が残らなければ好きにして構わない。そのくらいの危険は覚悟の上だろうし、知らないなら知らないでいい薬になるだろう。ただし、それ以上のことをした場合には、そうだな……これ以上小さくならないだろう？と言っておいてくれ」

「かしこまりました」

紅茶を飲み干して、ログハウスを後にした。

いずれ、爺には報いを受けてもらう。

その報いをどんなものにしようか悩みながら、家に向かった。

課外4時間目『学園長の悪企みとO H A N A S I』（後書き）

ぬうつうつうつ、若干スランプ気味。

いや、話のイメージは出来てるんだけど上手く表現が出来ないというか……

スランプって言うより、実力不足だな。

課外5時間目『教師の仕事と魔法使いの事情』（前書き）

O H A N A S I 明けの翌日、原作ならネギがパートナー関係で爆弾発言をする日です。

しかし！ エリオがそんな発言を見逃すわけが無い。
今日もエリオはブチキレる。

課外5時間目『教師の仕事と魔法使いの事情』

キティとO H A N A S Iした翌日

相変わらず職員会議に顔を出さないネギ。

「またですか……」

「すいません。お手数お掛けします」

新田先生が呆れ、俺がネギへの説教を頼む。もう最近はい課になりつつある。

「いえ、エリオ先生が謝ることではありませんよ」

「ですが、ネギへの説教を新田先生にお願いしているのは俺ですから」

「私もあるからこそやっているのです、気にしないで下さい。それにしても、これだけ言ってもダメとは……」

新田先生も何度同じ理由で説教したのやら。

同じ内容の説教でなければ、ここまで呆れられることは無いだろうに……

普通の教師なら、いい加減さじを投げてもおかしくない。

それでも、投げ出さない新田先生は立派だ。

本当に今度爪の垢でも飲ませるか？

教室

H R前にネギが明日菜に引きずられるようにしてやってきた。

「みんな。おはよー」

「あーん。ま、まだ心の準備が……」

明日菜は元気に挨拶をしながらネギの手を引いて教室に入ってきた。一方、ネギは最初こそ慌てていたが、キティが居ないことを知って安堵した。

「ネギ先生」

「っ!？」

俺は低い声でネギに声を掛けた。

「今すぐ職員室に行って新田先生から説教を受けて来い！ H Rは俺が変わりにやる」

ネギは何も知らないくせにと言いたそうに俺を睨む。

知っていようが知っていまいが、俺の対応は変わらない。魔法使いとしての事情など知ったことか。

少なくともネギは、教師として説教を受けるだけのこと（職員会議サボリ）を、やらかした事は事実だ。

「ちょっと、少しはネギの事情も聞いてあげなさいよ」

「知るか！ 個人的な事情など教師の仕事には関係ない。教師である以上、よほどのことが無い限り個人の事情など優先されない。それとも、それほどの事情があったのか？」

「そ、それは……」

俺は明日菜のフォローを一蹴した。

どうせ、キティのことが怖くて部屋に閉じこもっていたんだろう。

「さあ、さっさと行って来い。1時間目は英語だろう。それまでに少しでも説教を受けて来い」

ネギを教室から押し出した直後、HRの始まりを告げるチャイムが鳴った。

「それでは、出席を取る」

HRが終わり、1時間目が始まる少し前にネギが戻ってきた。

教室に入る前にキティの席をみて、居ないことを確認して安堵の息を漏らす。

まったく、生徒が居ないことに安堵する教師がどこに居る！

「それでは授業を始めます」

授業は始まったものの、ネギの心はココにあらず。と言った感じで、ポーツと生徒達を眺めてはため息を漏らす。

授業をやる気があるのか？ 少なくとも、俺には授業をやっている教師の顔には見えない。

「なんかネギ先生の様子がおかしいよ？」

「う、うん。ポーツとした目で私達を見て……　　ウチ、読み終わったのになんも言ってもらえへんし」

「あんなにため息ばかり……」

桜子、亜子、史香が話しているが、それに全く気付いていない。

亜子にいたっては、ネギに言われた部分を朗読し終わっても何の反応もないので、どうしていいのかわからず、2人の話に参加していた。

「セ、センサー。読み終わりました」

「えー？ あ、はい。ご苦労様です和泉さん。えーっと、つかぬことをお聞きしますが、和泉さんはパートナーを選ぶとしたら、10歳の年下の子供なんていやですよね？」

「えええ！？」

いきなりの爆弾発言に亜子をはじめクラス全体がざわめいた。

今、なんて言いやがった？

授業中に生徒にパートナーは嫌か。だと？

一般的に考えればパートナー＝恋人なんだろうけど、おそらくネギが言っているのは魔法使いとしてのパートナー、すなわち従者のことだろう。

「ふざけるのも大概にしろ！」

机を叩いて立ち上がった。

いきなりの怒声に生徒は全員静まり返って俺の方を見ていたが、俺はそんなことは気にせず、ネギの元に歩いていった。

「まとも授業に授業もせず呆け、拳句の果に年下のパートナーは嫌かだと？ ココを何処だと思っている！ 今、何の時間だと思っている！ 授業をやらないなら失せろ！」

ネギは怒鳴られて俯いたが、すぐに涙目で俺を睨んできた。

「エリオットに何がわかるって言うんだよ！ 何も知らないくせに

！」

「お前の個人的な事情など知りたいたも思わん。だが、どんな事情であろうと生徒の学ぶ時間を奪い、あまつさえその事情に巻き込むようなことを言う奴は教師でもなんでもない。周りに迷惑を振りまくだの屑だ！」

ネギは相変わらず俺を睨んでいるが、何も言い返さない。

涙がポロポロ零れ、そのまま教室を出て行った。その直後に、1時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「ふう。さて、1時間目の授業はコレで終わりだ。騒がしくして悪かった」

教壇に立って生徒達に頭を下げた。

「エリオ先生、頭上げてよ」

「そうだよ。驚いたけど、先生に言ってることは間違ってたなかつたと思います」

「でも屑は言いすぎじゃない？」

「ネギ先生の言い分も聞いてあげればよかったのに……」

さっきの俺に関して賛否両論の意見が飛び交う中、明日菜が教室を飛び出してネギを追いかけたことをきっかけに、ネギを心配する生徒達は明日菜の後を追って教室を出ていた。

課外5時間目『教師の仕事と魔法使いの事情』（後書き）

エリオと新田先生のストレスが解消される日は来るのだろうか？
淫獣の襲来も近い。

ストレスは解消されるどころか、マッハで蓄積される予感！

課外5・5時間目『うっかり吸血鬼と魔法使い見習い』（前書き）

今回の話は、原作でネギが励まされる裏で起きた出来事です。

合言葉は爺ザマー……！！！！

課外5・5時間目『すっかり吸血鬼と魔法使い見習い』

木乃香 side

エリオ君がネギ君を怒って、ネギ君が教室から出てった。

明日菜はネギ君を追いかけて、エリオ君はみんなに頭を下げとる。

昨日のことを聞いたかったんやけど、そんな雰囲気ちゃうしどうしよう……

昨日、帰る途中でお爺ちゃんに電話で呼び出されて、一緒に帰った明日菜と別れて校舎に向かったんやけど、気が付いたらベットの上で寝とった。

着とったもんが無くなっとなって、変わりに子供サイズのスーツの上着が申し訳程度に掛けられとった。

色からしてエリオ君のやと思うんやけど……

明日菜もなんか隠しとるっぽいけど、聞いても知らないの一点張りやし。エリオ君は今は近づけそうにないし。

他に知つとりそうなんって言っと、エヴァちゃんかな？

夢かも知れへんけど、桜通りでエヴァちゃんがウチの方に向かって飛んできた光景を見た。

「でも、エヴァちゃんも今日は休みみたいやしなあ」

「マスターがどうかしましたか？ 木乃香さん」

「あ、茶々丸さん。エヴァちゃんってどうしたん？ 風邪？」

「いえ、サボタージユです。仮病と言えなくもないですが、部屋の方で休んでいます」

「あ、そうなん。ちよつとエヴァちゃんに聞きたいことがあったんやけど」

「なんでしょうか？」

「昨日の夜のことについてなんやけど……」

「!？」

昨日の夜のことを聞きたいって言うたら、茶々丸さんがめっちゃ驚いっただ。

なんか、おかしい事言っただやろか？

でも、昨日の夜って言う言葉に反応するってことは、やっぱりエヴァアちゃんが飛んで来たのは夢とちゃうのかな？

「今、マスターに連絡を取りますので少々お待ちください。ちなみに、他に何か用件はありますか？」

「うーん。あ、エリオ君のことも聞きたいんやけど」

もしかしたら、エリオ君のスーツのことも聞けるかも知れやんと思っただけ加えた。

「……畏まりました。少し待っていてください」

茶々丸さんは教室から出て行ってしばらくすると帰ってきた。

「お待たせしました。マスターに連絡したところ、放課後に家へ招待するように仰せつかりました。放課後は空いていますか？」

「問題ないえ」

「では、放課後に家へご案内します」

そうって茶々丸さんは自分の席に戻った。

茶々丸 side

「でも、エヴァちゃんも今日は休みみたいやしなあ」

木乃香さんの口からマスターの名前が出ました。

もしかして、昨日の夜のことを覚えているのでしょうか？

確認のために声を掛けました。

「マスターがどうかしましたか？ 木乃香さん」

「あ、茶々丸さん。エヴァちゃんってどうしたん？ 風邪？」

「いえ、サボタージユです。仮病と言えなくもないですが、部屋の方で休んでいます」

「あ、そうなん。ちよつとエヴァちゃんに聞きたいことがあったんやけど」

「なんでしょうか？」

「昨日の夜のことについてなんやけど……」

「！？」

やはり、木乃香さんは昨日の夜のことを覚えているようです。

私は後から合流したので木乃香さんを吸血した時のことは知りませんが、これはまずいかもしれません。

「今、マスターに連絡を取りますので少々お待ちください。ちなみに、他に何か用件はありますか？」

「うーん。あ、エリオ君のこと聞きたいんやけど」

昨日の夜のことに加え、エリオ先生のことまでご存知となると、木乃香さんはすでに魔法の存在に気付いているのでしょうか？

いえ、これ以上は私が判断していい事ではありません。マスターに指示を仰ぎましょう。

「……畏まりました。少し待っていてください」

私は教室を出て人気の無い屋上に上がり、マスターに連絡しました。

「マスター。ご報告があります」

「なんだ？ 私は今、封印を解くので忙しいんだ、後に……」

「木乃香さんが昨日のことを覚えて居る可能性があります」

「なに！？」

マスターは昨日、エリオ先生の魔力に当てられて気絶した後、ネギ先生との戦いに備えてエリオ先生が掛けた魔力封印を解こうと必死になっています。

今日はエリオ先生の授業がなので、学校をサボって作業されています。

しかし、正規の登校地獄の効果で、わずかに使える魔力さえ授業時間はありません。

なので、今は魔法具を用いて術式を解析しているはずです。

「それは本当か！」

「おそらく事実だと思われます。さらに、エリオ先生のことも知りたいと言っていました」

「エリオのことまでか…… あいつめ、秘匿秘匿と言いながら思いつきり生徒にバレてるじゃないか。今度ネタにして苛めてやる。それで？ 報告はそれだけか？」

「いえ、その木乃香さんですが、マスターに面会を求めています」

「むう、昨日のことを覚えているなら、訳を知りたがるのは当然か

…… わかった。放課後にでも家に案内しろ」

「畏まりました」

連絡を終えて、教室に戻りました。

木乃香さんはさっきと同じ場所で待っていました。

「お待たせしました。マスターに連絡したところ、放課後に家へ招待するように仰せつかりました。放課後は空いていますか？」

「問題ないえ」

「では、放課後に家へご案内します」

用件を伝えて私は自分の席に戻った。

それにしても、木乃香さんは一体いつ魔法の存在を知ったのでしょうか？

木乃香さんが魔法の存在を知っているなら、学園長がマスターに依頼する必要は無いはずです。

学園長が知らなかった？

しかし、そうなると学園長の監視の目を潜り抜けられるほどの熟練者と言うことになります。

一体、彼女に魔法を教えたのは誰なのでしょう？

——放課後

木乃香 side

夕映達に今日は部活を休むことを伝えたら、夕映達も休むらしい。何でもネギ先生を励まそう会って言うのをやるからって、ハルナが夕映とのどかを巻き込んだらしい。

ウチも誘われたけど、用事があるって言って断った。

下駄箱に行くと茶々丸さんがウチを待ってた。

「お待たせ」

「それでは、マスターのところに案内します」

茶々丸さんの後についていくと舗装された道を通って森の中に入った。

しばらく歩くと、開けた場所に一件の家が建つとって、その入り口にエヴァちゃんが立つとった。

『《魔法の射手・氷の2矢》』

エヴァちゃんが外国語(?)を言った瞬間、ウチの足元にツララミたいに尖った氷が刺さっとった。
なにこれ!?

「何を驚いている? 初級魔法など見慣れているだろう?」

え? 魔法? 魔法って、あの魔法?
ファンタジーな話に出てくるあの魔法?

「おい茶々丸。どういうことだ? こいつは魔法使いじゃなかったのか?」

「いえ、私はそんなことは一言も言っていないませんが……」

「何? そうだったか?」

「はい。通信ログもしっかりと残っています」

「まさか……私の早とちりか?」

「そのようです」

「ええい! お前が紛らわしい言い方をするからいけないんだ!」

「責任転嫁されても困ります。マスター」

「うるさい! どうするんだ!? こいつに魔法バレしてしまった

ではないか！」

「マニユアル通り記憶を消せばよろしいのでは？」

「ばか者！　もし、エリオにバレて見る。間違いなくキレルぞ！？
嘘か本当か知らないが、もしもあの言葉が本当だったらシヤレに
ならん！　消去はなしだ」

やっぱり、本物の魔法みたいや。

さつきから記憶を消すとか物騒な話が聞こえてくるけど、ウチの記憶消されるんやろか？

忘れたくないんやけどな。でも、話を聞いとると、消さんとエヴァちゃんに迷惑掛かる見たいやし……

「エヴァちゃん」

「なんだ！？　今私はお前をどうするか考えるので忙しいんだ！
後に……」

「ウチの記憶消してええよ」

「そう、お前の記憶を……って、何だと？」

「せやから、ウチの記憶消してええよ。魔法のことは知ったらあかんのやろ？」

「確かに隠さなければならに事だが、いいのか？　怖くは無いのか？」

「怖いよ。どんくらい消されんのかわからんけど、少なくとも今話してることは消されるんやろ？」

「そうだな。消すなら、お前がこの家について私と会ったところから消すことになる」

消すのは最小限なんやな。記憶全部やなくてよかった……

「マスター、このかさんの記憶を消しても依頼がある以上いずれは知ることになると思いますか？」

「そうだな。このか、お前に借りは作らん。記憶消去の話はなしだ」
「……ええの？ エヴァちゃん怒られるんちゃうん？」

「知るか。今の私を本気で叱ることが出来る者など、エリオくらいだ」

「いえ、その気になれば誰でも可能かと。今のマスターの魔力は魔法を習い始めたばかりの子供レベル……」

「黙れ！ ボケロボオオオ！ 巻き倒すぞ！」

「ああああ、そんなに乱暴に巻いてはいけません！ マスター」

エヴァちゃんが記憶を消さへんって言った瞬間、足の力が抜けてその場にへたれこんでもうた。

ああ言っただけ、内心めっちゃ怖かった。

人の記憶を消す。そんな怖い魔法もあるんやね。物語に出てくるような魔法だけじゃないんや……

「おい、大丈夫か？」

「安心したらちよつと腰が抜けた」

「まったく、そんなに怖いならあんなことを言っな。そこらの魔法使いなら問答無用で消されてたぞ」

「そうなん？」

「十中八九な。奴らからすれば私もエリオも変わり者だからな」

「エリオ君もってことは、エリオ君も魔法使いなん？」

「あゝ」

「マスター……」

あ、エヴァちゃんが固まって、茶々丸さんも呆れ顔でエヴァちゃんを見てる。

そりゃそうか。魔法をバラすだけでも問題なのに、エリオ君が魔法使ってことまでバラしてもうたし。

でも、エリオ君って魔法使いやったんや。ぜんぜんそうは見えへん

かったな。

どっちかって言うと、大きい杖を持つとったネギ君の方がそれっぽいわ。

エリオ君も魔法使いならネギ君もそうなんやるか？ 麻帆^{マホ}良^{リョウ}に来るまで一緒やつたらしいし。

エヴァちゃんに聞いたら、うっかり口を滑らせてくれそうやけど、あんまり迷惑掛けるのも悪いし聞かんとこ。

「とにかく、お前が魔法のことを知った以上、私にはある程度の知識を与える責任がある」

「そうなん？」

「別に私でなければならぬわけではないが、私の自爆を他に知られてはまずいからな。特に爺にバレると面倒だ」

「お爺ちゃんも魔法使いなん？ でも、なんでお爺ちゃんやとまずいの？」

「それは今から説明してやる。全部話すには時間が足りなさそうだし、久しぶりにアレを使うか」

「アレ？」

アレって一体なんなんやろ？

エヴァちゃんの後について家の中に入った。

エヴァ side

まずいことになった。私のうっかりミスで、このかに魔法を知られてしまった。

このことが爺やエリオに知られば、私はタダではすまない。

爺の場合は、今回の依頼の報酬を取り消された上、勝手に孫娘に魔法をバラした借りを作ってしまう。

エリオの場合は言わずもかな、生徒を巻き込んだと知られたら今度こそおしおきが待っている。しかも、前回の去り際に意味深な言葉を残している。なんとしても、それだけは避けねばならん。

だから、魔法のことを教える代わりに今回のことを口止めする。

どうせ、爺の依頼ですぐに知ることになるのだから、それまで隠し通せばいい。

しかし、口止めも含めて基礎を教えるには時間が足りない。

だから久しぶりにアレを使う。

「エヴァちゃんこれも魔法なん？」

「ああ、そうだ。ココで1日過ごしても外では1時間しか経過していない。おとぎ話に出てくる竜宮城の逆バージョンだ」

「すごいなー」

「それじゃあ魔法について教えるが、その前に今のお前の立場について話しておく」

「ウチの立場？」

くつくつく。ただ教えるだけじ面白くないし、爺の指示に従うのも癪だ。

しつかりと教えてやろうではないか。魔法と言うものをな！

「まず、お前の父親と爺についてだ」

「父様も魔法使いなん？」

「厳密には魔法使いは爺だけだ。父親は術者ではなく剣士だ。さしずめ魔法剣士とも言おうか。少なくとも魔法の存在は知っている」

「そうなんや」

「そして、お前の父親はある世界を救った英雄の一人でもあるし、

関西を束ねる魔法使いの長でもある。実家も代々組織の長を務める魔法使いの家系だ」

「父様が？ それに実家もそうなん！？」

「そうだ」

「でも、ウチは今まで知らなかったえ？」

「詠春の意向で、極力お前には魔法の存在を知らせないようにしていたようだ」

「そうやったんか……」

さて、爺の株を思い切り下げてやるとするか。

「しかし、魔法を知らずともお前は英雄の娘だ。組織の旗印なり魔カタンクなり利用しようとする輩が出てくる。爺もその一人だ」

「お爺ちゃんも！？」

ふん。信じられないって顔だな。

どうせ、あの爺のことだ。何かあったときは、自分の方に来るように甘やかして懐かせたんだろうな。

「ああ、爺は私に依頼をしてきた。お前に魔法の存在を事件を装ってバラして欲しいとな。なぜだかわかるか？」

「……わからへん」

「お前が誰かに利用される前に自分の物にしたかったからさ。関西と関東、父親と爺が率いる組織は対立関係にある。一般人であればどちらでも利用できるが、お前が魔法の存在を知ってしまったえばそうはいかない。どちらも自分の陣営に引き込むために動き始めるだろう。爺の場合は、その先手を打つために父親が隠していた魔法をお前に教えるつもりだようだ」

もつとも、引き込む理由はまちまちだろうがな。

爺は自分の孫であり、関西の次期長候補で優秀な魔法使いになる可能性の高い駒を得るために動くだろうし。

父親は父親で、魔法を知った以上、関東においておく意味がないと連れ戻して、爺の駒にならないよう安全第一で守りに入るだろう。

そして、他の陣営や長達を快く思わないものは、自分達の正当性を示す旗印にしたり、戦争用の魔力タンクにしたり、便利な道具を手に入れようと躍起になるだろう。

どれもこれも、このか意見などまるで聞かず、自分の考えが正しいと思い込んで動くだけ。

このかにとって、これほど迷惑なことはないだろう。

「そつか……。そうやったんやな。ちなみにエヴァちゃんはどっち側なん？」

「私か？ 私はどっちでもないな」

「どっちにも付かへんって出来んの？」

「力があればな。もちろん両方の組織から敵視される可能性もある。このか、お前はどつする？ 西に行くか？ それとも東に残るか？」

今のこのかに私と同じように無所属を貫くことは不可能だ。

相応の力がなければ結局は取り込まれて終わる。

その力を身に付けようにも、周りはどちらかに所属している者ばかり。

それらと魔法関係で接触すればなし崩し的に所属扱いにされるのがオチだ。

本人が何と言おうと、大勢が所属していると認識してしまえば個人の意見など紙くず同然だ。

その紙くずを押し通すために力が必要が、教える者が所属して居るものしかいないと、ループする。

ゆえに、このかに無所属で居るという選択肢はない。

「エヴァちゃん。もう一つ教えて。エリオ君はどっちなん？」

「アイツも私と同じだな。どっちにも付いていない」

「エリオ君もすごいんやな」

「あれは少し違う気もするが、あいつもどちらの組織にも所属はしてない。もっとも、相手の組織が所属してないと見てくれるかどうかはわからんがな」

「魔法が使える状態でどっちかの組織の近くにおったら、相手の組織は向こうの味方やって勘違いするって事？」

中々理解が良くて話が進めやすいな。この調子でどんどん爺の株を落とそう。

私のささやかな復讐だ、もちろん、コレだけで終わる気は無いがな。

「そのとおりだ。お前がどちらの魔法を覚えるにしろ、ここに残れば父親の組織からは敵視されるかもしれんな」

「でも、知らんままではおれへのやる？」

「無理だな、仮に今回失敗したとしても、爺はいくらでも次の手を打つだろう。無論、自分の方に組しやすい様に操作した上でな」

「……なあ、エヴァちゃんはウチのことをどうするん？ お爺ちゃんにウチが魔法のこと知つとるってバラすん？」

「少なくとも今はその気は無い。今バラせば、爺の計画は狂わせられるだろうが、お前に魔法の存在を教えたしまったとして、爺に借りを作ることになる。それはゴメンだ。だから、お前がどんな判断をしようと、魔法を知っていることを公言するのは、爺の計画が終わった後だ」

「その計画はいつ終わるん？」

「予定では大停電の日だな」

「もう一週間きつとるやん！」

「で、どうする？」

「どうするって言われても、ウチは麻帆良を離れたくないし……」

「ならば、東に組するしかないな」

結局、東に所属するか。

まあ、これだけ爺の悪評を流せば言いなりの駒になることは無いだろう。少なくとも爺の言葉を疑い、理不尽なことには抵抗するだろう。爺め、ザマーミロ！

「エヴァちゃん」

「なんだ？」

「ウチにどっちにも付かんでええだけの力をちょうだい！」

「は？」

何だと？

「ウチはどっちの組織にも所属したくない。やから、どっちにも付かんでええだけの力を魔法をウチに教えてください」

このかは私に向かつて頭を下げた。

私に『闇の福音』と恐れられた悪の魔法使いに魔法を教えてほしいだと？

ああ、そうか。コイツは、まだ私が悪の魔法使いだと知らなかったな。

「だが、断る！　そこまで面倒を見てやる義理はない。魔法のことを教えるとは言ったがそれはあくまで基本的な知識だけだ。魔法の修行にまで付き合う気はない」

爺の思惑を潰すには最高かもしれないが、はつきり言って労力と報酬が釣り合わない。

大体、頭を下げるくらいで物事が通ると思うなよ？

木乃香 side

「断る。そこまで面倒を見てやる義理はない。魔法のことを教えるとは言ったがそれはあくまで基本的な知識だけだ。魔法の修行にまで付き合う気はない」

エヴァちゃんに魔法を教えて欲しいって頼んだけど、あっさり断られてもうた。

でも、ここは引けへん。ココで引いたらウチは東に所属することになってまう。

ウチの意見を見無視されて、下らない親子喧嘩に巻き込まれてまう。

「どうしてもあかん？」

これが最後のお願い。

これであかんだらウチは……

「ダメだ」

エヴァちゃんは冷たくウチをあしらった。

そつ……それならしゃあないな。

「じゃあウチ、エリオ君にエヴァちゃんに魔法のことを教えてもらったって言うてくるわ」

「なに？」

この先はお願いやない。『交渉』と言う名のただの『脅迫』や！

「だって、エヴァちゃんが教えてくれへんならエリオ君に聞くしかないやん」

「魔法のことを聞くなら爺でも実家でもいいだろう！？　なぜ、エリオに聞く！」

「言ったやん。ウチはどっちにも所属したないって。エヴァちゃんの言うとおりにしたら、どっちかに聞いた時点でもう片方の敵になつてまうやんか」

お爺ちゃんと父様の喧嘩に巻き込まれるなんてゴメンや。

どっちかに付いたら、もう片方と仲が悪くなるやん。そのくらいならウチはどっちつかずの中立でええわ。

それに、利用されるのも嫌やし。

魔法を知らんままでおるのが一番いいんやろうけど、ウチの安全的にもお爺ちゃんの計画的にも知らんとおんのは、今までの話で無理ってわかる。

やから、ウチは無所属を通す。けど、それをするには力が必要。そやから、魔法を誰かに教えてもらわなあかん。

でもどっちかに所属しとる人に教えてもらったら、その時点で否認なしに所属したと認識される。

やから、魔法は無所属の人に習うしかない。けど、ウチが知つとる無所属はエヴァちゃんとエリオ君だけや。

他にもおるんかも知れやんけど、知らんからどうしようもない。

もし、エヴァちゃんが教えてくれへんなら、消去法でエリオ君に聞くしかなくなる。

もちろん、エリオ君が教えてくれる保障なんて何処にもあらへん。でも、エヴァちゃんはウチに魔法をバラした負い目があるから、それを材料に交渉すればエリオ君に教えてって頼むよりは可能性があ

ると思う。

「エヴァちゃんもお爺ちゃんに知られんのも、エリオ君に知られんのも困るんやろ？　ウチも、このまま誰にも教えてもらえへんのは困るんや」

「私を脅す気か？」

「ううん。コレはお願い。でも、聞いてもらえやんだら、エヴァちゃんにとって良くない事になるかもしれへん」

「それを脅迫と言っんだ！！！」

うん。知ってる。

でも、今のウチにはコレしか手がない。

「何も一人立ちできるまで教えて欲しいわけやない。今回のお爺ちゃんの計画が終わるまででいいから！」

「ふん。なら、その後はどうするつもりだ？　結局力不足で取り込まれるのは目に見えているぞ」

「計画の後はエリオ君に頼むつもりや。今頼んだら計画外でウチが魔法を知ったことがバレるからエヴァちゃんは困るやろ？　でも、計画の後ならウチが魔法の存在を知っとってもおかしくないし、エリオ君に頼んでもエヴァちゃんのミスでバレたことはわからんやろ？」

「確かにそうだが……。いいだろう。ただし、コチラにも条件がある」

「なんやろ？」

「1つ、私のせいで魔法を知ったことを誰にも教えないこと。2つ、それを今回のように脅迫に使わないこと。3つ、今回の作戦に協力して、私の指示に従うこと。4つ、計画の後は私に干渉してくるな。この4つが守れるなら、基礎の修行くらいは見てやろう」

「わたったえ。その約束を守る。けど、4つ目の干渉はなんで？」

「無所属にも、色々あるんだ。同じ無所属でもお前が私の傍に来ると、私まで面倒に巻き込まれる。今回の計画は爺が周りを抑えているからいいが、それがなければ計画を遂行する前に、私を敵視している連中から確実に邪魔が入るからな」

「そうなんや……。わかった。計画が終わったエヴァちゃんに迷惑を掛けやんようにする。これで交渉成立やね」

「交渉……。ね。お前、爺以上に腹黒いな。将来は狸だな」

「えー、ウチ腹黒くないえ」

うーん。そんなに腹黒いんやろか？

エリオ君に言われたとおり、自分の願いを叶えるために使えるもんをすべて使って、一切遠慮せずにお願いしただけなんやけど……

「さてと、まずは計画の話だ。コレが成功せねば意味がないからな。言っておくが計画が成功しようが失敗しようが、今回の計画が終わった時点で教えるのは辞めるぞ。約束どおり、私のミスネタにするのみなしだ」

「わかったえ。なんとしてもこの計画は成功させんとな！」

こうして、ウチとエヴァちゃん＋茶々丸さんの3人で密談が始まった。

お爺ちゃん、ウチはお爺ちゃんの思い通りにはならへんえ。父様も心配してくれるのは嬉しいけど、ウチは自分の意思で魔法を使いたい。

やから、ウチはどっちの味方にもならへんし、必要ならどっちの敵にもなるえ。

もしも、無理やりウチを引き込もうとするなら、その時は覚悟しときゃ。

「ところで、エヴァちゃん。もう魔法のことを教えてくれるから聞

くけど、ネギ君もやつぱり魔法使いなんやんな？ あの子はどっち側なん？」

「小僧も書類上は無所属だろうが、使う魔法系統が東側、所謂西洋魔法と言われる魔法だし、麻帆良に居るから西側には東の所属だと思われているだろうし、本人も爺に説得されればあっさり東の所属になるだろう」

「外堀（まわりの認識）も内堀（ネギ君からの信頼）も埋まってるんやな」

「お前もそれに近いがな」

「でも、今から堀を越えてくる人らを返り討ちに出来るようにしてくれるんやろ？」

「それはお前の努力と才能次第だな」

「ウチ、頑張るえ！」

「ま、私は基礎しか教えんがな」

「え」

「そういう約束だからな。それに基礎を疎かにする魔法使いほど弱いものはないぞ？ 小僧のようにな」

「そんなにネギ君はひどいん？」

エヴァちゃんからどれだけネギ君が未熟なのか聞いた。

思えば、明日菜の服が消されたりしたけど、あれ全部魔法の暴発やったんや……

ウチも加害者にも被害者にならんように気をつけよう。

「そつえば、授業の時のアレも魔法関係やったんやろか？」

「アレ？」

今度はウチからエヴァちゃんに今日のネギ君の授業風景を話した。それを聞いたエヴァちゃんの顔は、今までで一番の呆れ顔やった。

「確かに、パートナーが居なければ勝ちはないと言ったが、だからと言ってパートナーが居れば勝てるという訳でもないだろうに……」
「せやんな。仮に今のウチがネギ君のパートナーになったとしても、戦いには役に立てそうにないわ」

「私は、小僧が3-A全員と契約して襲い掛かってきても、勝てる自信があるぞ」

「いまさらやけど、エヴァちゃん。どんだけ強いん？」

「そうだな。控えめに言って片手間で麻帆良を苦もなく滅ぼせるくらいだな。もちろん、防衛に当たっている魔法使い込みで」

「それは勝てる気せんな。ネギ君ってアホなん？ そんなんにウチらを巻き込もうとするとかありえへん。エリオ君が激怒した理由がよつやくわかったわ」

「まあ、絶対に無理とも言い切れんがな。仮契約にはアーティファクトがある」

「仮契約？ アーティファクト？」

「魔法使いとそれを守る従者の契約のことだ。手軽に何人でも結べて解除も可能な『仮契約』と、本人の実力に応じた人数としか結べず解除不可能だが仮契約よりも強力な『本契約』がある。そのどちらの契約でも、一定以上の力があればアーティファクトと言う強力アイテムが手に入る。そのアイテムの性能によっては戦況を覆すことも可能かもしれない」

「ほえー」

「ちなみに、契約方法はいくつかあるが、最近の主流はキスだな」

「キス！？」

「そうだ。もつとも、最近の平和ボケした魔法使いは契約方法がキスな事もあって、恋愛対象と交わす程度だな。ぶっちゃけ、お見合いと似たようなものだ。仮契約はお試してみたいなものだし。それにあれだ。危険を共にすると親近感がわくって言う吊り橋効果だったか？ そういうのもあるんだろう」

「ふーん。それって、誰とでも結べたりするん？ なんか制限あつ

たりせえへん？」

「ああ、魔方阵の上でキスするだけだからな。相手が異性でも同性でも異種族でも、触れられる生き物であれば関係ない。さすがに幽霊のような霊体となると難しいかもしれないが、それでも何らかの方法で触れられるようにすれば可能だろう」

「そうなんや……」

それならウチもエリオ君と結べるやろか？

仮契約なら解消も出来るみたいやし、問題あらへんよね！

なんとしても計画を成功させて、エリオ君と契約もとい、魔法を教えなくてももらわんとな！

課外5・5時間目『すっかり吸血鬼と魔法使い見習い』（後書き）

このかに魔法バレしました。そして期間限定でエヴァの弟子になりました。

黒い、黒いよ！ このちゃん。

『魔法女生徒・腹黒このか』 始まります！

それにしても、ずいぶん長文になったけどまだ書くべきことに到達していない件について……

また近いうちに、木乃香とエヴァの密談話を書きます。

課外6時間目『使い魔もどきと使い魔』（前書き）

今回は自称・使い魔、カモミールが登場します。それに伴い、エリ
才が使い魔召喚！？

課外6時間目『使い魔もどきと使い魔』

翌日

ネギはきちんと遅刻せずに職員会議に顔を出した。
遅刻せずに来たのはいい。だが、その肩には……

「キユ!？」

オコジヨ妖精がいた。ウェールズに居た頃に何度も見たことがある。
下着泥棒力モミール・アルベール。
ちなみに、現行犯で捕まえたのは俺だ。なんせ、母さんの下着を盗
もうとしやがったからな。

夜中に俺が張つておいた侵入者用の結界に引っかけて速攻で捕ま
えた。

その後の調べで余罪が次々と発覚して、オコジヨ刑務所行きになっ
たはずだが……

ちなみに、ネギは犯罪オコジヨの悪事を知らない。居なくなつて心
配していたくらいだからな。

それにしても、刑期はあと10年以上残っていたはずだ。脱獄して
きやがったか？

俺が犯罪オコジヨをじーつと睨んでいると、犯罪オコジヨは目を逸
らして冷や汗を流していた。

ネギはそんな俺の視線に気付かず、ドヤ顔をしていた。

おそらく『遅刻しなかったぞ!』とでも言いたいんだろうが、そん
なの教師として当たり前のことだ。

それに気付いた俺は、普段なら『コレで普通だ』と言うところだが、
呆れて何も言う気にもなれなかった。

何も言わない俺に不満だったのか。ネギは新田先生の所へ行つた。

そこでは、ドヤ顔だけじゃなく、きちんと職員会議に出ていたことを伝えていたが……

「そのくらい当たり前です。コレからも遅刻しないで下さい」

新田先生もあつさり流していた。

ネギは褒められることを期待していたのか相変わらず不満そうだった。当たり前のことをして褒められるわけないだろう。その前にどれだけ自分が普通以下だったのか自覚して恥じるべきだ。

これが、生徒なら褒めて伸ばすのも手だが、ネギと俺は子供である以前に教師だ。

子供として見てもらおうという時点で甘えでしかない。

子供として見てもらいたいなら教師なんか辞めるべきだ。

「それと肩のそれは何ですか？」

「あ、この子は力モくんです」

誇らしげに犯罪オコジョを見せるネギ。

いや一般人から見れば、ただのオコジョなのだが、それでも学校に連れてくるものではない。

まして、放し飼い状態などありえない。

「そうではなく、なぜペットを学校に連れてくるんですか？ 必要ないでしょう。早く戻してきなさい」

「力モくんは大人しいから大丈夫です」

「そういう問題ではありません。仕事中にペットを連れてくる教師がいますか！」

「で、でも……」

「いいじゃないですか、新田先生。うるさく鳴くような動物でもないですし」

名前はなんて言ったか忘れたが、魔法教師が口を挟んだ。新田先生はその教師を見て呆れている。
まさか、成人した大人の教師からそんな言葉が出るとは思わなかったんだろう。

「あなたは、本当に教師ですか？ 教師が校則を違反する事を許可するなんてありませんね」

「な！」

「エリオ先生の言うとおりです。教師が校則を違反するようでは生徒に示しがつきません。まして、必要のないことであればなおさらです」

新田先生も俺の意見に賛成してくれた。

言葉には出していないが、周りの一般教師も頷いている。
頷いていないのは一部の魔法教師くらいだ。

「ネギ先生も自分のする事なら、なんでも正しいと思わないでください。現にあなたのクラスでペットを連れてきている生徒が居ますか？」

「……いません」

「そのペットは授業をするための教科書のように、授業に必要ですか？」

「……いりません」

「なら、ちゃんとルールは守りなさい」

「……わかりました」

新田先生に言われて、しぶしぶ会議室を出て行った。
おそらく、犯罪オコジョを部屋に置きに行ったのだろう。

「というわけで、エリオ先生。HRの方をお願いします」
「わかりました」

今から置きに行けば、転移魔法でも使わない限り、朝のHRには間に合わない。

今日も言うか、いつも通り俺がHRをすることになった。
ネギがまともにHRをやるのは月に何回あるやら……

——その日の放課後

相変わらず、ネギは放課後仕事は逃走。^{エスケープ}

新田先生は『またか……』と呆れていた。もう、俺は何も言わない
いつも通り自分の仕事とネギの仕事で生徒に関わる書類で、期限の
近いものを新田先生に頼まれてネギの代わりに書いた。

新田先生は俺がネギの書類を終わらした分、副担任（俺）に回す仕
事で担任^{ネギ}でも出来る仕事はネギにやらせると言っていたので、もう
今度から重要書類はネギの方じゃなく俺の方に回してくれるように
頼んだ。

始めは担任^{ネギ}がすべき書類だと言っていたが、肝心の担任^{ネギ}がしない
上に、もしも気付かずに期限を越えてしまう方が問題だろうと言っ
て、説得した。

こうして、書類の量こそ変わらないものの、俺の書類仕事は担任と
同じ重要度になった。

新田先生も申し訳なさそうにしていたが、自分から言い出したこと
だと言ってフォローした。新田先生は何も悪くない。悪いのは教師
の仕事を放棄したネギだ。

結果、書類仕事をしないネギの評判は一般教師の間でますます落ち
た。

俺としては、ネギの評判がどうなるうが知ったことじゃない。

書類をしないことで被る不利益が、ネギだけに降りかかるなら、俺だって進んで面倒なことはしたくない。

しかし、不利益はネギだけではすまない。生徒にも降りかかる。それなら手出ししないわけにはいかない。

新田先生に書類の再配分を手伝ってもらい、期限の近いものだけを終わらせた。

いつもなら、終わらせられるだけ終わらせるところだが、今日はそうもいかない。

ネギの元に犯罪オコジョが居るからだ。奴は必ず事件を起すだろう。その前に監視を付けておかないと、取り返しのつかないことが起きてからでは遅い。

「新田先生。これ、期限が迫っていた書類です。今日は少し用事があるので、帰ってもいいですか？」

「ええ、構いませんよ。急ぎの書類は終わっているようですし、再配分で手間取ってしまいましたから」

「ありがとうございます。明日はいつもより多めに終わらせますので」

「いえいえ、普段でも多いくらいですよ。今日みたいに少しくらい少ない日があったほうがバランスが取れてちょうどいいですよ。無理はしないで下さい」

「はい。それではこれで失礼します」

新田先生に挨拶をして、ダッシュで部屋に帰った。

「お帰りなさい。お父様。今日は早いね」

「ただいま、由梨絵。お前、部活とかしないのか？」

「特に興味がある所もないし、興味ないところに居るくらいなら、家でお父様と一緒に居る方がいい」

「そうか。今からちよつと魔法使うから来客がきたら頼む」

ちなみに、明石教授を始めとした大学教員には、由梨絵と同居していることは知れ渡っている。

一般教師には親戚、明石教授や大学理事長などの信用の置ける人物には真実を話してある。

「お父様が魔法を戦い以外で魔法を使うなんて珍しい。何するの？」

「使い魔召喚」

「使い魔？ 急にどうしたの？」

「ちよつと監視対象が出来たんでな。高位の魔法使いなら一目で気付かれるかもしれないが、同じ使い魔相手なら早々バレないだろう」

「事情はわからないけど、とりあえず来客の相手をすればいいのね」

「ああ、特に予定があるわけじゃないけど念のためな。人払いでも使えれば楽なんだけど、緊急時以外で人払いや認識阻害の使用は禁止だからなこの職員寮」

一般教員も住んでるから、下手に使うと色々問題がおきるのだ。

なんでも過去に、一般教員が急ぎの書類を魔法教師の元に取りに行った時に、近くで魔法使いが人払いを使ったせいで、危うく重要な書類の期限を過ぎるところだったらしい。

それ以降、罰則がある訳ではないがこの教員寮で人払いなどの結果を使わないという暗黙の了解が魔法教師の中で出来たらしい。

暗黙の了解でそれを守るところから見ても、この教員寮の魔法教師は魔法使いとしてではなく、教師として働いていることがわかる。それはさておき、床に紙を敷いて魔方陣を書き込んでいく。

「こんなもんかな」

5分ほど掛けて魔法陣を書き上げた。

一通りチェックして、間違いがないか確認する。

「間違いがないな。それじゃ始めるとしますか『使い魔管理協会に接続、使い魔指定。種族：猫妖精^{ケットシー}、性別：雄、特記事項：面会に使い魔側の承認が必要、伝言：再開の約束を今果たそう』」

魔方阵に触れて、使い魔を管理する協会の受付に繋いで、使い魔を送ってもらう。

使い魔の契約には2種類あり、協会を通さず個人同士で契約するモノと協会に仲介・斡旋してもらった使い魔と契約する方法がある。ちなみに、ネギと犯罪オコジョは厳密には主従関係ではない。

使い魔の契約を交わしていないからだ。

使い魔の契約を交わした場合、方法に関わらず仮契約のように魔力の供給が可能になるし、視覚・聴覚の共有が可能になる。

また、使い魔が犯罪を犯した場合、主にも監督不行き届きで罰則が下る。なので、もしも使い魔契約した状態で、犯罪オコジョが下着泥棒をやらかせば、ネギにも罰則が下ると言うわけだ。

おそらく。犯罪オコジョは学園関係者の差し金だろう。ネギがパートナー云々言っていたから、仮契約の仲介にでも呼び込んだんだろう。

でなければ、碌に隠蔽魔法の使えない獣の侵入を許すはずがない。もしも、そうでないならザルな警備にも程がある。

「『指定条件で検索しています。しばらくお待ちください』」

魔方阵の向こうから機械的な声が聞こえる。
待つこと5分。

「『条件に該当する使い魔が見つかりました。召喚します』」

魔法陣が輝き、その輝きが収まると1匹の黒猫が座っていた。

「お久しぶりです。主。再開できて光栄です」

「久しいな、クーガー。またよろしく頼む。それと、口調を戻せ。気持ち悪い似合わないキシヨい」

「キシヨい言うなよ!? 主が確認するためにこうしろって言ったんだろうが!」

「悪い悪い。けど、コレで信じてもらえたか?」

「ああ、はいはい。姿形は変わっても、俺をこんなにぞんざいに扱うのは主だけだよ。それで、今の名前はなんてーの?」

「今は、エリオット・クルーデルだ」

「はいよつと。それじゃ、ちゃっちゃつと契約してお仕事に移りま
すか」

「相変わらず、素と猫かぶりの差がすごいな」

「そりゃね。信用する主にしか見せねーからな」

この黒猫は、過去の俺の使い魔だ。

見た目は猫でも、猫妖精^{キャットシー}はれっきとした魔獣だ。だから、普通の猫よりも長生きだ。

先代以降の関係者で、今生きているのはこいつを含めても両手で足りるほどだ。

もつとも、それは寿命的な話で、もしかしたらすでに死んでいるやつも居るかもしれないけど。

「まったく、どうせなら毎回使い魔として契約してくれよ。雑魚の勧誘がウザくつてしょうがねえんだよ」

「必要のない時に呼んでもしょうがないだろ」

「そうだけだよー。最近、くだんねー主義主張を掲げる魔法使いが多くてよ。そんなものの使い魔とかまっぴだらぜ? あいつら、使い魔を替えのきく道具としか思っていやがらねえし、優秀な使い魔は

自分の価値を高める飾り程度にしか思っちゃいねえ」

「そういう連中に騙されないように、再開の合言葉を決めておいた
だろう？」

「ま、たしかにアレのおかげで、主かどうか一発でわかるけどさ」

「とりあえず、契約書出せ。サインするから」

「あいよ」

クーガーは自分の影に手を入れて、中から羊皮紙を取り出した。

そこには使い魔契約に関する注意事項と契約を結ぶサインが書かれていた。

俺はそれを受け取り、軽く指を噛んで血文字で自分の名前を書く。

「ほら、これでいいだろ？」

「あいよ。それじゃ、コレを放り込んでつと『契約成立！』」

サイン入りの羊皮紙を受け取ったクーガーは、それを魔方陣に放り込んで契約成立の宣言をした。

『使い魔契約の成立を確認しました。またのご利用お待ちしております
ます』

その声を最後に、魔法陣の輝きは消えた。

「これで、ようやくウザい勧誘ともおさらばだ。それで、俺は何を
すりゃいいんだ？」

「あるオコジヨ妖精を監視してもらっ」

「ふーん。どんな奴？」

「下着泥棒二千枚のオコジヨ妖精。カモミール・アルベールだ。妖^そ
精^{つち}の業界じゃ有名だろ？」

「あいつかよ。ってか、あいつは服役中だろう？ あいつのせいで

オコジヨ妖精の評判は一時期、地に落ちたぞ？ おかげで猫妖精側^{ケットシー}に使い魔契約の依頼が殺到したしょー」

「脱獄したらしい。今は俺の同僚の使い魔もどきやってるよ」

「もどきってことは正式な契約はしてねーの？」

「おそろくな」

「はー、どっちも腐ってやがるな。犯罪オコジヨは言うに及ばず、主は主でなにかあったら切り捨てる気満々かよ」

クーガーは吐き捨てるように呟いた。無理もない。

俺とクーガーで最初に使い魔契約のきっかけも、元を辿れば捨て駒として切り捨てられて死に掛けたコイツを拾ったからだしな。

「まあ、主の方は使い魔契約のこと自体よく知らないだろうけどな」

「ますます信じられねー。そのうち犯罪オコジヨに騙されて、使い魔契約結ばされるんじゃないかね？」

「かもな。ま、その辺は本人達の問題だからどうでもいい。騙されるな騙されるで、同僚が馬鹿だったってだけだ」

「薄情だねえ」

「もう、アレを矯正するのは諦めた。学校の教師でも匙を投げるぞ。投げない教師も居るけど、アレは教師の鑑だね」

「主がそこまで言うってことはよっぽどだな。で、俺はその犯罪オコジヨを見張れりゃいい訳ね。具体的には、どんな動きをしたら報告すりゃいい？」

「下着泥棒などの物的被害は証拠を押さえるだけでいい。ただ万が一、人的被害が起こりそうな場合は何をおいても連絡だ。最悪、お前に被害者を守ってもらう」

「あいよ。けど、無力なオコジヨ妖精如きが、人を傷つけられるとは思わねえけど？ あいつら攻撃魔法使えねえし」

オコジヨ妖精は通信妨害や秘匿通信など、サポート系の魔法が得意

だ。

ケットシー

猫妖精は、逆に攻撃魔法や防御魔法など、主の戦闘のサポートが得意だ。

それゆえに、陽動として使われやすい。

単におびき寄せたり気を引くだけならまだしも、最悪敵陣に放り込まれて捨て駒にされることさえある。

ケットシー

大戦時には、それで多くの猫妖精が死んだ。

「人的被害は犯罪オコジヨが主を唆すことも含める。直接的じゃなくとも間接的に危害を及ぼすかもしれないからな」

「犯罪オコジヨの口車に乗るとか、どんだけ無能な奴だよ！」

「名前を教えてもいいが、口外はするなよ？」

「あいよ」

「ネギ・スプリングフィールドだ」

「スプリングフィールドってーと、あの英雄の？」

「直系の息子だ」

「はー、英雄様の息子は馬鹿なんだな」

「いや、親も馬鹿だぞ」

「そうなのか？」

「ああ」

「ま、いいや。じゃ、早速監視に入るわ」

「ああ、よろしく頼む。居場所は女子寮に同僚の部屋があるからそこに居るはずだ。そこで張って、見つけたら常時監視を頼む」

「あいよ」

クーガーは元気に返事をして手近な影に飛び込んで転移した。

さてと、これであの犯罪オコジヨの監視は大丈夫だな。

あとは、侵入者と勘違いされないように電話で学園長に伝えておく。監視が徒労に終わることを祈りながら……

課外6時間目『使い魔もどきと使い魔』（後書き）

というわけで、新オリキャラの猫妖精^{ケットシー}クーガーが登場しました。彼もまた、過去のエリオを知る1人。

なお、犯罪オコジヨは使い魔業界でもオコジヨ妖精の業界でも評判です。（悪名的な意味で）

例え成長ルートでは犯罪者でも証拠がなければ捕まえないエリオですが、だからと言って疑わないわけでもありません。

危険人物を監視するのは、事件を未然に防ぐ意味では有効です。

課外7時間目『襲撃と罰』（前書き）

今回は茶々丸襲撃事件。

エリオがまたキレル……

最近、キレてばかりな気がする。

課外7時間目『襲撃と罰』

今日も今日とて放課後の書類仕事。

相変わらず、ネギは居ない。

今日の朝は職員会議こそ間に合ったものの、新田先生にHRの代理を頼まれ、当人はネギに昨日の放課後の件でお説教。

今日は、一応書類仕事は終わらせてから行ったが、他の先生に帰りの挨拶もなく、まるで次の授業に行くような気軽さで帰って行った。帰りの挨拶も出来ないのか……

まあ、最低限の仕事はしたから、教師としてはどうこう言うことではないが、挨拶はマナーだろうに。

しかも、本当に最低限だ。

あまりの書類の減ってなさに心配になり、中身を確認すると今日が締め切りの書類だけ綺麗になくなっていた。

翌日締め切りの書類はそのままだ。

あいつは、先に終わらせておくと言うことをしないのだろうか？

そんなとき、クーガーから念話が入った。

『主！』

『クーガー。何かあったか？』

『主は明日菜って言う生徒を知ってるか？ 特徴はツインテールに

鈴の髪飾り、オレンジの髪にオッドアイ』

『俺のクラスの生徒だ』

『そいつは魔法関係者か？』

『おそらくはそうだ。何処まで関わっているか知らないが、ネギが魔法バレした一般生徒だ』

『そいつが、ガキと仮契約したぞ。どうやら、きちんとした手順を踏まなかったからスカカードみたいだが……』

『それは本当か！？』

『間違いない。一応、従者側も承諾の上らしい』

わざわざ、自分から魔法に関わるか。

神楽坂 明日菜。いや、『黄昏の姫御子』アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアよ。

『契約が承諾の上なら、俺がどうこう言うことじゃない。放っておけ。もし、従者が魔法で酷い目に会ったとしても、それは自己責任だ。助ける必要はない』

『了解』

自分から危険に飛び込むものまで守るつもりはない。

例え、魔法の危険性を知らないまま踏み込んだとしても、それは自分自身の責任だ。

それからしばらくしてまた、念話が入った。

『主、緊急事態だ。あのガキと従者は、どうも襲撃を仕掛けるつもりらしい。生徒を後ろから尾行し（つけ）てやがる』

『何！？ 誰にだ？』

『ガキから漏れ聞こえた名前は茶々丸だ』

アイツ！ まさか、キティの従者である茶々丸を先に倒して各個撃破するつもりか！？

『場所は何処だ！ 俺も向かう。もしもの時は、茶々丸の護衛を頼む』

『了解した』

イスから立ち上がり、大急ぎで職員室を後にした。

新田先生を始め、一般教師は大慌てで職員室を飛び出した俺をみて

驚いていたが、今は誤魔化している時間が惜しい。
クーガーの魔力を頼りに、茶々丸の元に急ぐ。

『主、ガキが隠れるのを辞めて、生徒と話してるぞ。あ、クソ！
戦闘始めやがった！ 人払いも認識阻害もなしかよ！？ 主、俺は
危うくなったら護衛すればいいんだな？』

『そうだ』

『了解した。魔法に集中するから、しばらく連絡できねえぞ』

一方的に念話が切られた。

もう、のんびり念話している余裕はないということか。

周りを見回して人氣がなさそうな裏道に飛び込んで、認識阻害を展開する。

出来れば、あまり認識阻害系は使いたくないが、時間がない。

『月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。《億の細道》』

影に沈みこんで、出た先は舟の上だ。

「おや、またエリオ様ですか。珍しく頻繁に使われますな」

「船頭、俺の使い魔の居る場所まで頼む」

「かしこまりました」

5分ほどして、扉の前で止まった。

この空間が外と違う流れでなければ、こんなに時間をかけるなどありえなかっただろう。

「こちらでございます。いつも通り、人目のない場所でございます」
「助かった」

そう言つて、俺は扉を潜つた。

クーガー side

『場所は何処だ！ 俺も向かう。もしもの時は、茶々丸の護衛を頼む』

『了解した』

今、俺はガキの後ろにある木の上から様子を見ている。

『主、ガキが隠れるのを辞めて、生徒と話してるぞ』

主に連絡しながら見守っている。

もしも、戦闘を始めたら、障壁魔法を遅延詠唱付きで唱える。

あのガキがどの程度か知らないが、出が早く威力が下がる無詠唱では不安だからな。

「茶々丸さん。あの……僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「申し訳ありません。ネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対です。」

「うつつ……仕方ないです」

ガキが杖を構え、その従者の女もいつでも飛び出せるような体勢を取った。

まさか、このままやる気か？

今、人目がないつつても、廃墟じゃねえんだぞ？！ いつ人が来てもおかしくねえ。

最近のガキは秘匿って言葉を知らねえのか？

「では、茶々丸さん」

「……ごめんね」

「いきます！『契約執行10秒間。ネギの従者・神楽坂 明日菜』」

『あ、クソ！ 戦闘始めやがった！ 人払いも認識阻害もなしかよ！？ 主、俺は危うくなったら護衛すればいいんだな？』

『そうだ』

『了解した。魔法に集中するから、しばらく連絡できねえぞ』

一方的に念話を切って、人払いと障壁魔法の準備に入った。人払いを完成させ、障壁魔法も5秒もあれば待機状態に出来る。詠唱を完成させて、いざと言う時に備えた。

「ラス・テル・マスキル・マギスキル……」

ガキは暢気に詠唱。従者は契約執行で生徒の妨害を邪魔してやがる。確かに有効な戦術ではあるが、従者の女の技量がまるで足りてないな。

力に振り回されてる上に、向こうの方が技量は上だな。

手加減してるのか？ まさか、この期に及んで？ 命が掛かってるって言うのに？

雑な攻防の末、生徒にデコピンが入って体勢を崩した。しかし、カウンターで足払いを仕掛けて、相手の体勢も崩した。

1対1なら、これで終わりだが……

『魔法の射手・光の11矢』

体勢を立て直す前に打ち込んだか。しかも、ただの『魔法の射手』じゃないな。馬鹿みたいに魔力を込

めてやがる。

本気で生徒を殺す気か！？

「追尾型魔法。至近弾多数。よけませんね。マス……」

『解放。《黒迎の守り猫・100匹》』

遅延させた障壁魔法を展開した。

生徒の目の前に突如出現した半透明の黒猫が、飛来する魔法の射手に体当たりをして生徒を守った。

その生徒の周りには、まだ90匹以上の半透明な黒猫が寝転んだり、あくびをしたりして待機している。

これだけ呼び出せば、あのガキでは守りを突破できないだろう。もし、突破しようとしても重ね掛けするだけだが。

おっと、主の到着だ。これで俺の出番は終わりだな。

エリオside

クーガーの隣に出たときには、ネギの攻撃をクーガーが防いだところだった。

「え？ あれ？ なんで！？ コレは魔法？ でも誰が……」

「ちよつと、ネギ何なのよアレ」

明日菜は茶々丸に近寄ろうとして、90匹近い猫に威嚇され引いた。

「お前ら、ずいぶんふざけたマネをしたな」

後ろから怒気を込めた低い声で言った。

「エリオ先生。これは一体……」

茶々丸は茶々丸で、突然現れて自分を守った黒猫に驚いていた。

「何、いざという時のために掛けておいた保険だ。生徒を襲う教師の風上にも置けないクソ野郎がいなくても限らないからな。案の定、役に立っただな」

沈黙するネギの横を通って茶々丸の隣に立った。

俺は猫に威嚇されることもなく、すんなりと通れた。

「ちよつと！ その言い方は酷くない！？ ネギだってやりたくてやったわけじゃないのよ！」

「黙れ、明日菜。どんな理由があろうと実行したことに、変わりはない！」

「でも、理由くらい聞いたっていいじゃない！ ネギは命を狙われているのよ！？ 心配じゃないの！？」

「ぜんぜん。大体、命が狙われていると言うのなら、なぜココから逃げない？」

「それは、ネギがマギなんちゃらになるための修行があるから」

「命の危機と修行を天秤に掛けて、修行の方が大事だと思ったから残ったんだろう？ そんなもの理由にならん。逃げようと思えばいくらでも逃げられる。それなのに逃げず、自分を守るために積極的に生徒に危害を加える。自分勝手にも程がある。残るなら自分の身くらい守れるだけの力をつけてからやるんだな」

「じゃあ、もしもアンタが同じ立場になったらどうするのよ！」

「当然残る。生徒を途中で放り出す気はないからな。俺自身はいくら襲撃されようとも自分の身を守る自信はある」

明日菜の問いに毅然として答えた。

襲ってくるのがキティでなくとも、先手を譲って正当防衛の条件を成立させた上で、倒すことが可能だ。

学園長が全力で来れば、少しは勝負になるかもな。

もつとも、殺す気でくる相手を弄ぶレベルの勝負だが。

「あんた、そんなに強かったの？」

「少なくとも、そのクソ野郎以上だと言う自負はある」

「じゃあ、助けてくれたっていいじゃない！」

「助けを拒んだのはネギ自身だ。なぜ、協力を拒んだ奴を積極的に助けなきゃならない？」

ネギは、噂の話をした時に、はつきりと俺の力を借りないと言い切った。

それがこの結果だ。

協力者の手を払い、拳句その場で襲われた際に反撃するならまだしも、時間を置いての不意打ち。

ふざけるなという言葉しか出てこない。

「ネギ、あんた本当にそんなこと言ったの？」

「……はい。自分で何とかすると」

「自分で何とかするねえ。笑わせる。明日菜を巻き込んでおいてよく言っ」

「……」

「なんにしても今回の件は学園に報告させてもらっ」

「そんな！ そしたら僕、マギステルマギになれなくなるじゃないか！」

「知るか。教師の癖に生徒を守るでもなく、巻き込みあまつさえ襲うような奴がなれるわけないだろうが！」

ネギはそこまで言って青褪めた。

その程度のことわからずに茶々丸を攻撃したのか……

つくづく救いようがない。大方、犯罪オコジヨの口車にでも乗せられたんだろうが、だからといってネギに非がないわけではない。

最終決定を下すのは、実行犯であるネギなのだから。

「明日菜。お前も同罪だぞ。未遂とはいえ、殺人の手助けをしたんだからな」

「え？」

「さっきの魔法を茶々丸が受ければどうなっていたかわかるか？」

「それはもちろん、怪我して動けなく」

「馬鹿者が！ あんな威力の魔法を急所に受けたら即死だ。運良く逸れたところで、腕・足に当たれば二度と使い物にならなくなる

！」

「嘘……」

「お前は魔法を何だと思っている？ アレか？ 御伽噺に出てくるような人を助けるものばかりだとも思っているのか？」

「だって、魔法は人を救うために使われるって……」

「人を救う？ 茶々丸に死ぬような攻撃をしておいて？ 笑わせるな」

「で、でも、茶々丸さんはロボットだし、治せば……」

「治ればいいわけか？」

「え？」

『魔法の射手・幻光の11矢』

明日菜の目を見て、無詠唱で魔法の射手を出した。

その矛先は全て明日菜に向いている。

それを見た明日菜が青褪める。

「治ればいいんだよな？ 安心しろ。人間だろうがロボットだろう

が傷はきつちり消してやるから」

「いや、待つ……」

『発射』

放たれた魔法の射手が、防がなければ茶々丸に当たっていたであろう箇所をなぞるように、明日菜の体に突き刺さった。

「あああああああ」

「あ、明日菜さん」

「どうだ？ これでもまだ同じことを言えるか？ 直せばいいと。ああ、ちなみに威力はネギの撃った物の10分の1だ。って言うても痛みでそれどころじゃないか」

指を鳴らして、すぐに幻影魔法を解く。

魔力無効化能力があるせいで、攻撃魔法は無効化されるから魔法の痛みを教えられない。

だから、目を合わせて精神干渉系の魔法を掛けた。

精神干渉といっても催眠術に近い、魔法の射手の幻影を見せ、痛覚を少々刺激しただけだが。

もちろん、コレもやりようによっては痛みでショック死させたり、幻影の世界に意識を封じて、現実ではただの人形にすることも可能だ。

「あ……れ……？」

「大丈夫ですか明日菜さん！？ 急に倒れたと思ったら叫びだして……」

「え、あれ？ 今、私撃たれて」

「何を言ってるんですか？」

明日菜の言葉に首をかしげるネギ。

そりゃ、あれは明日菜個人に見せた幻影なんだから、他人がその幻影で何を見せられたか知ることは出来ない。

「あれでもまだ治せばいいと言うか？」

「ひい?! い、言いません。もう、言わないわよ！」

「よろしい。よかったな神楽坂、俺の生徒で。生徒じゃなかったら、本物を同じ威力でぶち込んでわからせるところだ」

黒いオーラを纏いながら笑顔でそう言っていると、ガタガタと震えながら答えた。

「は、はい」

それを見たネギは俺が何かしたと気付いたのか抗議の目を向けてくる。

魔法で明日菜を傷つけようとしたことが気に食わないのか。それとも、俺が明日菜に危害が気に食わないのか。

「エリオ。何をしたか知らないけど、明日菜さんにひどいことするな！」

「知らないなら口を出すな。コレは俺と神楽坂の問題だ。神楽坂、後やるべきことはわかるな？」

「はい。茶々丸さんごめんなさい」

「いえ、私は……」

明日菜が茶々丸に向き直って謝っている間に、俺はネギと対峙する。

「さてと、ネギ。お前は別だ。自分がやろうとしたことの重大さを思い知れ『魔法の射手……』」

『待て、主。監視魔法で監視されているぞ。おそらく、そのガキ

が魔法を撃った辺りからだ』

「つち。『光の11矢』」

クーガーから念話が入った。どうやら、正義の魔法使い（笑）が事件を嗅ぎ付けたらしい。

しかたなく、直撃から間接攻撃に切り替えて、魔法の射手をネギの周りに打ち込む。

監視されている状態でわざわざ問題を起す必要はない。

本来なら、ネギに茶々丸に撃った魔法の射手と同じ箇所に同じ威力でぶち込みたかったが、ネギの周りに打ち込んで着弾の衝撃を与えるだけに留める。

ネギは俺の魔法の射手に対して、単純に対魔法障壁だけしか張っていない。

対魔法障壁だけでは、魔法の射手を防ぐことは出来ても魔法の射手が着弾した衝撃は防げない。

対魔法障壁に当てず、地面に当てて衝撃でネギを吹き飛ばす。

これなら、直接攻撃したことにはならない。後で地面を修復しておかないといけないのが難点だが……

「うわ?!」

ネギは衝撃で10mほど吹き飛ばされた。

ゴロゴロと地面を転がって止まった。

すぐに起き上がったところを見ると、目を回したのか、どこかにぶつけて意識をなくしたのか。

まあ、どうでもいい。すぐに正義の魔法使い（笑）が対処するだろう。

「今回のことはきっちり報告させてもらう。茶々丸、家まで送ろう」
「ありがとうございます。エリオ先生」

「気にするな」

「ところで、この猫達は？」

「ああそれか『クーガー、もう魔法を解いていいぞ。引き続き監視を頼む。あと、犯罪オコジヨには、影で制裁を加えておけ。AFの^{アーティファクト}使用も許可する。裁量は任せる』」

『了解。主。ドキツイのお見舞いしてやんよ』

クーガーに連絡して、400匹近い猫や人払いを解除させて、俺は茶々丸をキティの家まで送る。

その後は、キティに今回の件の報告と学園長にも同様の報告を入れて、職員室に荷物を取りに行かないとな。

まったく、自分の仕事はやらなくせに余計な仕事を増やしやがって。

学園長も今回の件で、ネギの修行を失敗にして教師をクビにしてくれればいいが、無理だろうな……

課外7時間目『襲撃と罰』（後書き）

ネギへの制裁ならず、原作ではネギが自分の身に受けてたけど、アレはあくまで障壁ありのダメージであって、障壁なしなら死ねますよね。

あと、オリジナル設定で使い魔にもAFアーティファクトがあります。

使い魔のAFは主が誰であっても、使えるAFは同じです。

ただ、主の素質次第で出力の上限が決まり、酷いと使うことすら出来ません。

クーガールのAFはいずれ。

使い魔で指名されるのは、自分自身の能力以外にAFに寄るところが大きいです。

となると、大人気のクーガールのAFは一体……

課外8時間目『もう1つのお仕置きと成功しない悪巧み』（前書き）

今回は、間接的なネギへのお仕置きです。

妖怪がうるさいですが、きつちり正論で論破します。

あとがきに大事な報告があるので、一読いただければ幸いです。
あ、アンケートじゃないですよ？

課外8時間目『もう1つのお仕置きと成功しない悪巧み』

ネギと明日菜にお仕置きを施した後、茶々丸をログハウスまで送り、今回の事件を話した。

当然、烈火のごとく怒り、

「いますぐ、坊やの息の根を止めてやる！」

と息巻いて飛び出そうとするのを、茶々丸が必至に抑えていた。もちろん、俺も止めた。そんなことをすれば、逆ギレした正義の魔法使い（笑）が飛んでくるのは目に見えているからだ。

まあ、キティがそんな奴らに負けるとは思っていないが。

キティの代わりに、俺が学園長と交渉してきつちり落し前をつけると伝えると、何とか大人しくなった。

しかし、なぜキティのために行動するのに、貸し1になるのだろうか？あと、なぜか茶々丸が俺をかわいそうな目で見る。なぜ？

キティから次の行動を聞くと、次が最終戦らしい。俺はその戦いで、攻撃に分類される魔法の中で捕縛魔法しか使わないように言い含めておく。

キティは、今回の復讐をしたがったが、それでは俺が交渉する意味がないので控えてもらう。

「また悪巧みか？」

「悪巧みとはひどいな。学園長の思惑は潰すべきだろう？ もちろん、依頼を果たした上でな」

「くくく。そうだな。私は報酬さえもらえるなら文句はないし、エリオにも貸しが出来る。いいことづくめだ」

貸しになるのは納得できないが、そうでもしないとキティが飛び出

すので、我慢する。

話を終わらせた後は、学園長室に向かった。

「学園長、お話があります。入ってもよろしいでしょうか？」

「入って構わんぞ」

「失礼します」

ドアを開けて中に入ると、相変わらず何を考えているのか読めない微妙な笑顔で座っている妖怪爺がいる。

「さて、学園長。俺が何を言いに来たかわかっていますか？」

「……ネギ君のことじゃな。しかし、生徒に手を出さない限り、この件は不干渉のはずじゃが？」

「ええ、そういう話でしたね」

「ならば、なぜネギ君に手を出したのかの？ そちらから約束を破る気かのう？」

「まさか。俺はきちんと約束の範囲内で行動しましたよ？」

「なんじゃと？」

「俺の生徒である、エヴァンジェリンと茶々丸に危害を加えようとしたので手を出したんですよ。ああ、加えようとしたではなく加えたが正しいですか？結果的に割り込んだおかげで未遂では済みましたが、手を出さなければどうなっていたやら」

「それは詭弁じゃ！ それでは、ネギ君はエヴァに手出しできないも同然ではないか！」

「何が詭弁ですか！ ああ、学園長は2人は生徒でないと仰るので？ それなら、なぜ中学に通わせてるんですか？ 飛び級で卒業としてみえばいいでしょう。彼女はそれだけの学力を有しているし、期間も何度も中学生を繰り返しているので問題ないでしょう？ もっとも、そんなことをすればエヴァを縛る枷になっている『正式な登校地獄』は解けますけどね」

「ぐっ……」

「補足させてもらえば、今回はネギから茶々丸へ先制攻撃だったから止めました。攻撃を受けてその場での正当防衛ならまだしも、時期を置いての不意打ちでは正当防衛などとは到底呼べませんからね」

「……つまり、エヴァの方から攻撃し反撃であれば手出しはせんということかの？」

「ええ、本来であれば防衛に努めるか逃げろと言いたいところですが、正当防衛なら許容範囲です」

正当防衛に値する範囲ならばね。

正当防衛といえど、やりすぎれば過剰防衛だ。

はたして、この妖怪爺がその辺りのことをわかっているのやら……

「よかるう。最後の戦いはエヴァの方から仕掛けるように言っておく。これでお主が手を出すことはないの？ ネギ君はエヴァに襲われて、その反撃をするために戦いになる。これならばお主が手を出す必要はないの？」

「ええ、正当防衛に則って行われるのであれば、俺は見ているだけです」

「強制証文の準備をしよう。そこに一筆入れてもらう。なに、念のためじゃよ」

「俺は別に構いませんが、条件があります」

「なんじゃ？」

「今回の事件でネギをしつかり叱り罰を与えること。出来れば、修行失敗にして欲しいところですが、それはしないでしょ？ 学園長も周りも、だからそれ以外で最大級の罰を与えてもらいます。教師が教え子を襲うなどありえませんか」

「む、しかし、それではネギ君の経歴に傷が……」

「ふざけるなよ！ ネギの経歴如きどうでもいい！ 優先すべきは加害者の教師ではなく、被害者の生徒だ。信賞必罰は当たり前だろ

う！　それが無いなら、俺はサインする気はない」

「……いいじやろう。4割減俸5ヶ月でどうじゃ」

「プラス今回の件の説教をしてもらう。一般人に置き換えた上でな。一般人なら教師が生徒に暴力を振るった以外の何者でもないからな。本来ならそれに相当する罰を与えて欲しいがな。二度とこんなことをしないように。それから被害者である茶々丸への謝罪もだ。」

「わかった。ネギ君にしっかりと言い含めよう」

妖怪爺が用意した証文には、さつき爺が言ったことと同じことが書かれている。

ネギへの罰を条件として、最終決戦で正当防衛するネギに手を出さないこと。

俺は、条件が改ざんされていないことを確かめてサインした。

「では、失礼します」

サインを終えた後はさっさと学園長室を出た。

学園長も今度は契約に穴がないか再確認しているだろう。ヘタに気付かれる前に姿を消したい。

正当防衛の意味に気付いていない。

正当防衛とは、やむをえず行う防衛行為のことだ。

そう、防衛だ。自分の身を守るためにする行為、当然それを超えて攻撃を加えれば過剰防衛でしかない。

つまり、自分に害がなくなった状態。相手が気絶したり、降参したり、戦闘不能や戦意喪失した時点で、終わりだ。

枷のないエヴァをその状態にするのは、俺でも至難だろう。殺していいなら別だが。

だから、ネギはエヴァにトドメをさせない。エヴァも、正当防衛内の敗北条件を満たすことはないだろう。

どんなに手を尽くそうと、ネギに勝ちはない。奇跡が起きて引き分

けがいいところだ。

また必要な行為だったかどうか問題になってくる。

捕縛魔法で捕まえようとする相手に、正当防衛だからといって攻撃魔法で殺そうとすれば、文句なしで過剰防衛だ。

捕縛魔法で捕まった後に命の危険があるとしても、未来なんて可能性でしかないのだから、相手の命を奪う理由にはならない。そんな危険があるなら、戦うよりも逃げるべきだ。それをしない時点で、ネギの正当性など皆無だ。

よって、始めから正当防衛など成立していない。

あの証文は紙くず同然。ネギの勝利は皆無。キティは、捕縛魔法のみで戦わせるつもりだしな。

これならば、ネギが攻撃魔法を使った時点で契約破棄に値する。

どうせ証文を書かせるなら、『一切手出ししない』とするべきだったんだ。もっとも、そんな証文にはサインしないがな。

その後は、職員室に戻り、飛び出していったことを上手く誤魔化した。

かなり真剣な表情だったらしく、先生方も何事かと思っただけ。今後は気をつけよう。

その後数日は、静かなものだった。

学園長からネギに罰を下し、説教したことを聞きながら休日過ごし、また学校が始まる。

クーガーの報告で、休日の間ネギが寮を飛び出し、山籠りしていた楓の所で一晩明かしたらしいが、魔法関係の出来事はなかった。しかし、無駄にやる気を漲らせていたと言っていたのが心配だ。

また暴走しなければいいが……

課外8時間目『もう1つのお仕置きと成功しない悪巧み』（後書き）

始めから妖怪の悪巧みなど、成功するはずもなし。

全てはエリオの手のひらの上。

……本当にそうだろうか？

希望調査

感想にコメントを頂いた中で、ちづ姉を〴〵の従者にしてほしい。

などの意見が多数寄せられております。

そこで、このルートでのちづ姉・いいんちょを扱うべきか意見を募集します。

念のため言っておきますが、今回はアンケートではありません。

頂いた意見をどう反映するかは、話として出来上がるまでお教えできません。

今のところ出ている意見としては

『従者にしてほしい』という意見です。

エリオ・ネギ・小太郎の誰かの従者にして欲しい。

という意見を多数いただき、どんな風に関わるのか？ 誰の従者になるのか？

など頂いております。

もちろん、エリオの従者入り〴〵ヒロインに追加です。

他にも、従者にはならず、魔法の存在を知っているだけの認識者になり（魔法を知らなくても）、相談役みたいなポジションになるとか。

かなり先の話ですが、原作のように魔法世界から帰ってくるまで魔

法の存在を知らない一般人で居るとか、帰ってきてても魔法の存在を知らない一般人として過ごすとか。

作者は、正義の魔法使い（笑）の従者にされて、主人公と敵対するのもいいかなーとか危険なことも考えてたり……

正義の魔法使い（笑）とか言葉巧みに騙しそうですしね。

まあ、作者の妄言はさておいて（そもそも賢い2人が騙されるわけがないやん。洗脳なら別だけど）、今後2人をどう扱ってほしいのか読者に意識調査をします。

大事なことなので2度言いますが、アンケートではありません。

同じ意見を数多く言われても、たった一人の意見が作者に響けばそれが採用されます。

『の従者希望』など、一言を書かれても全く響きません。

なぜ？ どうして？ そういう扱いにしてほしいのか。といった感想を募集します。

『原作で従者だったから』という意見など論外です。相応の理由を考えてコメント下さい。

ちなみに、小太郎を女性化して欲しいという意見も頂いております。まあ、コレは作者的にはやってみたい試みではありますが、それをやると前提が色々壊れますので、やるなら番外編になります。独走・成長のコタは男の子なのでご安心下さい。

課外9時間目『停電と大浴場の惨劇』（前書き）

今回はいよいよ最終決戦（茶番）です。

でもネギ視点はありません。描写するまでもないですから！
そして、エリオに予想外の事態が！！！！

課外9時間目『停電と大浴場の惨劇』

何事もなく、最終決戦（茶番）の日がやってきた。

今晩は学園全体のメンテナンスがあり、停電になるらしい。

俺もネギも見回りの仕事を任されている。

新田先生の経験によると、こういう夜には、普段と違う夜を楽しもうと、部屋を出る生徒が多いらしい。

それを聞いて、思わず頷いてしまった。

騒ぎ好きなウチの連中なら嬉々として出そうだ。

それこそ、肝試しとか言い出して校舎に侵入しても不思議じゃない。それに加え、学園結界も普段より弱まるため外からの敵の侵入も多いらしいが、それは警備を担当する正義の魔法使い（笑）の仕事だ。のはずなのに、近右衛門が勝手に学園の警備に組み込んでいた。

しかも、3人の魔法教師付きでだ。

大方、契約の穴に今更気付いたのか、単純に契約違反した場合の足止めだろう。

むろん、通達された時点で拒否した。

俺は、一般教師として夜間の見回りを組まれている。

こっちはきちんとした教師の仕事だ。

大体、キティの件で参加した正義の魔法使いの集まりで、きっちり警備の参加は断ったにも関わらず、相談もなく勝手に決められた正規の仕事外の仕事など引き受ける義理はない。

人手が足りないと言うなら、ネギにでもやらせればいい。

もっとも、ネギは最終決戦（笑）で手が放せないだろうがな。

まあ念のため、警備が打ち漏らしても大丈夫なように、新田先生に頼んで女子寮の担当にもらった。

「と、言うわけで、今晩は僕達が寮を見回るので、8時以降は部屋から出ないで下さいね」

「『『『『』はい』』』」

珍しく、ネギが朝のHRをしている。
いや、それが普通の光景なのだが……

「俺からも一言っておく。もしも、用もなく部屋から出るのであれば容赦なく捕まえて、正座と課題をくれてやる。明かりとペンと課題の貯蔵は十分だ。夜の勉強会をしたい奴は出歩くといい」

「『『『『サー！ 絶対に出ません』』』」

しっかりと釘を刺しておく。

「のどか、チャンスじゃない？ 今晚出歩けば、エリオ君と2人つきりになれるよ？」

「で、でも、怒られるよ」

「暗闇に灯る小さい明かり、静まり返った夜の寮、憧れの先生と2人つきり！ 萌えてきたー！ コレで1本描ける！」

なにやら元ルームメイトが騒いでいるが、無視する。

もし本当にやったら、容赦なく倍の課題をくれてやろうと決めた。
それからのどか、もうすこし友人は選んだほうがいいんじゃないか？
いや、人のことは言えないか……

——その晩

俺は寮の中、ネギは寮の外を見回っている。
もちろん、ネギとカモにはクーガーが付いている。
何かあれば、すぐに知らせが来る手筈になっている。

「コチラは学園放送部です。コレより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください」

放送が終わり、午後8時の鐘の音と共に寮内の電気がすべて消えた。すると、すぐにクーガーから念話きた。

『主、早速来やがった。ガキの前に吸血鬼のメッセンジャーが来た』
『メッセンジャー？ 茶々丸か？』
『いや、あのメカ娘じゃねえ』

となると、まさか一般人を半吸血鬼化させたか？

『そのメッセンジャーの特徴は？』
『ピンクの髪で、黒いリボンで左右を小さく結んでるな。あと、なぜか素っ裸。あ、ガキが名前呼んでるな。まき絵って言うらしい。ありや確実に半吸血鬼化してるな。牙も生えてるし、何より身体能力が並じゃねえ。リボンであちこち掴んで飛び去りやがった。どうする？ 追つか？』

まき絵か。

そういえば、前の事件で噛まれていたな。

もう大丈夫かと思っただが、まだ抜けていなかったか。

『メッセンジャーの内容は？』
『大浴場まで来い！ だぞうだ』
『大浴場だな。俺が向かう。お前はそのまま、ネギに付いている』
『了解』

巡回コースを変更して大浴場に向かう。この時間なら誰も入浴して

いないはずだが……

耳を澄ませて音を拾うが、特に音はしない。

とりあえず、入浴中だったり、着替え中の生徒はいないようだ。

「キティ！ 居るのはわかってる！ 出て来い！」

「ああ、エリオか。坊主かと思っただが先にお前が釣れたか」

声のした方を見ると、屋根の上に美女が座り、その周りに3人のメイドが立っている。

茶々丸とまき絵だけでなく、木乃香までいる。

「キティ！ お前、また木乃香を吸血したな？」

「ふん。コイツの魔法バレも依頼の範疇だからな。適当なところで解いて、坊主との戦闘風景でも見せるさ」

「それは邪魔させてもらおう」

スーツのズボンから折りたたみの指揮棒を出して構えた。

「お前もコイツの事情は知っているだろう？ 放置したところでいつかは巻き込まれる」

「そうならないように守るのが教師の役目だ」

「ならば、お前はずっとコイツの傍に居てやるというのか？ 私からすら守りきれなかったくせに」

たしかに。俺が守れるのは担任をしている間だけだし、それでもつきっきりで守れるわけじゃない。

「だからと言って、周りの勝手な考えで知らせていいわけじゃない！」

「ならば、本人が学びたいというのであればどうする？」

「意志に任せる。必要というなら教えてやる。嫌だというなら記憶を消してやる。どっちだろうと俺が決めることじゃない」

「ふん。まあ、言質は取れた。次のフェイズに行くでしょう。まき絵、坊主がここに来るはずだ。入り口で対応しろ、その後ココから引き離せ」

「はい」

屋根の上からまき絵がリボンで木々を掴んで飛び去ろうとする。

「させるか！ 『魔法の射手』《束縛の闇矢》」

「邪魔者を招く訳にはいかんのでな！ 『魔法の射手』《束縛の闇矢

》
『』

俺と同じ呪文を当てて消滅させられた。

エヴァと茶々丸だけなら、放置して行くところだが木乃香がいるとなると、放置するわけにも行かない。

なにより、魔法に関わらせないために木乃香に魔法を見せるわけにはいかない。

そう考えると、さっきの魔法は迂闊だった。杖をポケットに戻し、接近戦の構えを取る。

接近戦で2人を捌きながら、キティの魔力を封印する。

すでに、前に掛けた封印は解けているようだしな。どうせならもっと強力なものにしておけばよかった。

ネギが何かしてきた時に対応するために余力を残して封印したのがまずかったか。

「ふん。魔法を捨てて格闘で来るか。いいだろう。相手をしてやろう。もっとも私ではなくこいつらだがな。行け！ 茶々丸、木乃香」

「はい。マスター」

「りょーかいや」

茶々丸と木乃香が屋根から降りて、一直線に俺の元に向かってくる。キティは動かないところを見ると高みの見物か。

まあいい。魔法のネックは木乃香だ。木乃香の目さえなければ魔法は使える。

まずは木乃香を気絶させる。その後で、キティは魔力封印の上、お仕置きだ！

「いくえー」

「来い！」

木乃香の攻撃を右に左に避ける。いくら半吸血鬼化させて身体能力を強化しようと、技術が素人なら攻撃を避けるのは容易い。

大振りになったところであえて受け流し、体勢を崩させ首筋に手刀を入れてようとした。

しかし……

「そうは行きません」

「くっ！」

あと少しというところで茶々丸に横やりをいれられる。

木乃香自身は素人でも、茶々丸がやかいだ。トドメを入れようとしても必ず妨害される。茶々丸から止めようにも、今度は木乃香がそれを防ぐ。

木乃香は技術はないが、半吸血鬼化で強化された力はある。一撃を入れられるとかなり危ない。

どちらも単体では相手にならないレベルだが、連携がしっかりしている分やりにくい。その上、俺は怪我を負わせないように手加減しなければならない。

これなら、クーフエイと戦ったときの方が楽だ。しばらく攻防を続

け、何度目かの妨害を木乃香から受けて、その攻撃を避けようと
して下がった。

「かかった!」

キティを見るとガッツポーズしていた。

足元に魔法陣が現れ光始めた。おそらくあらかじめ準備しておいた
トラップだろう。

しかし発動が遅い。これなら発動する前に逃げられる。

「逃がしません」

脱出しようとしたところで、後ろから茶々丸に抱きつかれるように
取り押さえられた。

そのせいで脱出が遅れ、魔法が発動した。

魔方阵から魔法の鎖が伸び、俺を茶々丸ごと拘束する。

「くそ!」

なんとか力づくで外そうとするが思ったより強力だ。だからこそ発
動まで時間がかかったんだろう。

おまけに茶々丸に抱き付かれているので、力任せに破ろうとすると、
彼女の腕まで一緒に壊してしまう可能性がある。

「くくく、よくやった茶々丸」

高みの見物をしていたキティが降りてくる。

木乃香は、ずっとキティの後ろに付き従った。

「さてと、それじゃあ、本題に入らせてもらおうか?」

「本題だと？」

「ああ、約束通り私が先だからな。木乃香」

「わかってるえ。ごめんなーエリオ君。こんな手荒なこととして、でもどうしてもウチはやらなあかんだんよ」

おかしい。

吸血鬼化したなら、ついでに精神掌握するばすだ。

でなければ飼い犬に手を噛まれかねない。しかし、精神掌握しているなら、ただ言葉に従っただけで会話など成立しないはず……

「まさか、始めから意識があつたのか？」

「あたりやー」

「ああくそ！ 本当にどうなってるんだ！ 状況がさっぱりだ！」
「なに今にわかる」

そう言つて、エヴァが捕縛結界の上にさらに魔方陣を書き足す。

これは契約の魔方陣か？

なぜ、そんなものを……まさか！？

「では、頂くぞ」

両手で頭を固定される。なんとか首を動かして抵抗を試みるが、残念ながら吸血鬼の筋力には叶わない。

「んむ……」

「むぐ！？」

キティにキスされ、魔法陣が光り出した。

光が収まると、1枚のカードが出てきた。

表面を見ていないのでどちらが主かわからないが……

「じゃ、次はウチやな」

「ちよつと待てえー！　木乃香、お前はなぜエヴァと居る！お前は」

「一般人のはず？　違うえ、ウチは魔法使いや。魔法のこともよう知つとる」

「な……に……？　一体いつから」

「そんな今はどうでもええやん。ちゅっ」

木乃香にキスされてまた、仮契約カードが作られる。

「ふはははは、これでお前は私のものだ！　誰にも渡すものか！」
「初キッスしてもうた」

キティは高笑いし、木乃香は顔を真っ赤にして契約カードを抱いてクネクネしている。

だが、そんなことはどうでもいい。

一般人だと思っていた木乃香が魔法の存在を知っていて、キティに協力していて、オマケに半吸血鬼化している。

そして、2人に無理やり契約されて、近右衛門は木乃香に魔法の存在をバラそうとしている。

もう矛盾と意味不明な事だらけで訳がわからない。

「…………ざけ…………な」

木乃香が魔法関係者ならもう遠慮は要らない。

ポケットにしまった指揮棒に手を添えて、束縛魔法を破壊する。
あとは茶々丸の物理拘束だけだ。

「茶々丸。もう用は済んだだろう？　放してくれないか？」

なるべく穏便に話しかけた。

正直、茶々丸の腕を破壊してでも抜け出したい気分だが、残った理性がそれを押し留める。

もし断るようなら、生徒としての対応から魔法使いの従者としての対応に切り替えなければならない。

「はい。マスターが失礼しました」

「ああ、こういう言い方はあまりしたくないが、茶々丸は命じられただけだろう。それなら仕方がない。しかし、ロボットでなく茶々丸として存在したいなら、いやなことはきちんと断ることだ」

「……はい」

粘られるかと思ったが、あっさり解放された。

さてと、それじゃあお仕置きの時間だ。

誰も逃げられないように、誰にも邪魔されないように、大浴場に封鎖結界を敷いて準備万端だ。

「さて二人とも、覚悟はいいか？ ああ、言い訳は不要だ。どんな訳があろうときっちり仕置きしてやる」

瞬動で調子に乗って高笑いしているキティの前に移動し、鼻を摘んだ。

「ふがつ！？ な、何をする！」

スーツの懷に手を入れて虹色の液体が入ったフラスコを取り出した。それをキティに見せ付けるように揺らし、片手で器用にコルクを抜く。

「な、なんだ！？　そのやばそうな色の液体は！　待て、よせ！　そんな物を近づけるな」

「くくく、そう怖がるなよ。毒じゃないから安心しろ。もつとも、お前にとっては毒以上に恐ろしいかもしれないがな」

フラスコの口をキティの口に突っ込んだ。鼻は塞いでいるから飲まざるを得ない。

虹色の液体がフラスコの中から減っていく。多少飲みきれない液体はキティの口の端から怪しく輝き零れ落ちる。

中身が空になったところで、フラスコをスーツの懷にしまった。

「ゲホツゴホゴホ、なんだアレは！　妙な色のくせに無味無臭だったぞ！」

「すぐにわかる」

「なに、ぐつ、あ熱い……」

キティがその場に蹲うすくまつて、苦悶の声をあげる。

しばらくして、落ち着いたのか。立ち上がった。

「エリオ！　一体今の薬はなんだ！？　何を飲ませた」

「前に言っただよな？　今度無関係な生徒を巻き込んだら小さくするって」

「ま、まさか」

キティが真っ青になった。

冗談だとも思っていたのだろうか？　俺はやるといったことはやる。

木乃香がいつから魔法関係者だったのかは知らないが、少なくとも下らない茶番にまき絵を巻き込んだ。

その時点で、お仕置き確定だ。

キティが大浴場の鏡の前に走って、明かりの魔法で自分の姿を確認した。

「なんだこれはああああ！！！」

大声で叫んだ。

それはそうだろう。なんせ、鏡に映ったキティは……

「体が縮んで……」

そのままぱたりと倒れた。

鏡に写ったキティの姿は、タダでさえ中学生に似つかわしくなかった10歳の身体よりも縮んだ、幼稚園児と言っても通用しそうな身体だ。

あの薬に気絶させるような効果はないから、気絶したのは精神的なものだろう。

さつき飲ませた薬は、何代目かの時に作ったもので、肉体を若返らせる若返り薬の不完全版だ。

精神までは若返らないから不完全もいいところだが、成長しないことがコンプレックスのキティには効果抜群だろう。

大体、フラスコ1杯で年齢を5年くらい肉体を若返らせる。

まあ、0歳以前まで若返らせるとそのまま死に至るから取り扱いには十分注意しなければならぬが……

ともあれ、キティへの罰はこれで終了だ。しばらく幼児の体で過ごしてもらうとしよう。

「さて、次は……」

「あ、ははは」

振り返って、木乃香をの方向に直ると、苦笑いしながら一歩後ろ

に下がった。

「どうして逃げるんだ？ 近衛」

「え、えーっと、その……」

「別にやましいことをしていないと言うなら、逃げる必要はないだろっ？」

「そ、そやね」

と言いつつ、俺が一步踏み出すごとに木乃香が一步下がる。それを繰り返すうちに、木乃香の背中が大浴場の壁に当たった。

「さて、もう逃げ場はないな。さて、どうしてくれようか」

「あはは、えーっと優しくしてくれると嬉しいな」なんて」

「だが断る。許可もなくキスした上に、仮契約まで勝手に結んで許してもらえと思うか？」

「うにゃあああああああ」

2度目の悲鳴が大浴場に木霊した。

課外9時間目『停電と大浴場の惨劇』（後書き）

もう何度目かになるエリオのお仕置きモード。

木乃香へのお仕置きは読者の皆さんの想像にお任せします（笑）

ああ、やっとエリオ無双の準備が整った。本格的な無双は、やっぱり修学旅行かな？

今回は、後日談的な話を入れます。それで吸血鬼編は終了予定。

課外10時間目『悪企みの結果と予想外の事態』（前書き）

最終決戦（茶番）の後の話その1

課外10時間目『悪企みの結果と予想外の事態』

お仕置きを済ませた後、茶々丸にキティの姿を今までどおりに見せる幻覚の魔法具を預けて2人を任せた。

俺は2人と仮契約して出来たカードを回収して大浴場を出た。

クーガーに状況を聞くと、まき絵相手に大浴場に続く廊下でネギと明日菜の2人で戦いを始めたらしい。

攻撃魔法は使っていないようなので、介入せずクーガーに隠密性の高い人払い結界を張ってもらっている。

まき絵は、明日菜をリボンで拘束し新体操に使う棍棒(?)で殴り飛ばしていた。

ネギが捕縛魔法を放つが、まき絵の投げたボールに当たり誤爆させられる。

次第にネギも明日菜も息が上がってきたのに対して、まき絵は多少汗をかいているものの、まだまだウォーミングアップにしかかっていないように見える。おそらく、ネギに勝てる見込みはない。

メンテナンス終了10分前になっても決着がつかないので、『眠りの霧』を放って3人とも寝かせた。

まき絵だけ回収して部屋に放り込んだ。あとの2人は知らない。

翌日の放課後、時間を指定されて近右衛門に呼び出された。

クーガーに念話を入れて確認すると、予想通り俺の前にネギと明日菜が呼ばれている。

俺は時間になるまでクーガーと視覚・聴覚共鳴して、クーガーが見聞きしていることを見聞きさせてもらう。

視覚・聴覚をそれぞれ自分と繋げる。2面テレビを見ているような

感じた。

呼び出されたネギたちが学園長室に入るとキティと木乃香がすでに待っていた。

「ちょっと！ どうしてエヴァンジェリンがここにいるのよ！ 木乃香もそこは危ないわよ！」

「ふん。私だって好きでココにいるわけじゃない。爺に言われて仕方なく居るだけだ」

明日菜はネギを庇い、ネギも後ろで杖に手を掛けている。

対してキティは不機嫌そうに言い捨て、木乃香は飄々とした笑顔でその隣に立っている。

「これこれ、止めんか2人とも。もうエヴァは敵ではない」

「どういうことですか？」

「まず2人々に説明しておかねばならないことがある。今回の吸血鬼事件はワシとエヴァが仕組んだことじゃ」

「「ええ！？」」

学園長の自作自演発言を聞いて驚く二人。

「あまり大声で叫ばんでくれ。コレには事情があるんじゃない」

「事情ですか？」

「うむ。エヴァとの戦いを通して魔法使いの戦いを言うものを学んでもらおうと思ったんじゃないが、色々手違いがあつての。ネギ君だけの予定じゃったんじゃないが、エリオ君や木乃香まで巻き込んでしまった」

「木乃香まで！？」

「そうじゃ、木乃香はワシの孫であると同時に、西にある魔法協会

の長の娘でな。家柄も代々魔法使いを束ねる役を担ってきたのじゃ。親の方針で魔法に関わらせんように生活させてきたが、今の件で知られてしもつた」

「すいません。僕がすっかりしていないばかりに……」

ネギが頭を下げる。

近右衛門も白々しい。始めから巻き込むのも計画の内のくせに……

「いいんじゃないよネギ君。それで、ネギ君に1つ頼みがあるんじゃないが」「なんですか？」

「今まで隠してきたが木乃香も魔法を知ってしまった。記憶を消すのは簡単じゃが、どのみち知らずに過ごすことはできません。今回はワシが仕組んだ安全な事件に巻き込まれただけですんだが、次はもつと悪い形で魔法を知るかもしれん。そうなるくらいなら、今から魔法を教えようと思うんじゃない」

「そうですね。それがいいと思います」

ネギの賛同を得たことで少し口が近右衛門の口が釣り上がる。

「そこでネギ君に魔法の先生をやっ……」

「ああ、お爺ちゃん。それならいらんよ」

ずっと話を聞いているだけだった木乃香が話に割り込んだ。

「どういうことじゃ？ 魔法を教わらねば木乃香の身が危ないんじゃないぞ」

「うん。それはわかるえ。でも、ネギ君に習う必要なんかあらへん」

「それは……」

「こつ言つことや」

そう言つて木乃香が制服のポケットから仮契約のカードを取り出した。
カードは裏面を見せているので、誰と契約しているのかはわからない。

「仮契約カードじゃと!？」

「木乃香さん! 一体誰と!」

俺は慌ててスーツの中から昨日回収したカードを取り出した。

1枚はエヴァを主とした俺の仮契約カード、もう1枚は俺が主で木乃香が従者の仮契約カードだ。木乃香の仮契約カードを確認すると、俺が持っているのはマスターカードであり、コピーカードを作ろうとしたが制作済みで作れない。

おそらく、木乃香が持っているのがコピーカードの方だ。

一体、いつの間に複製したんだ……

「ウチはエリオ君と契約しとるから、エリオ君に魔法を教えてもらう。エリオ君もウチに学ぶ意志があるなら教えてくれるって言うつたし」

「しかし、ネギ君の方が学校での成績も優秀……」

「成績優秀なんが教えるのも上手とは限らんやろ? それに、ウチはエリオ君の従者なんやからエリオ君に教わってもなんも不思議やあらへん」

「それは確かにそうじゃが……」

「そういうわけで、ウチのことは心配せんでええよ」

「でも木乃香! アイツ信用できないわよ! いきなりあたし達に攻撃して来たし」

「それは攻撃されるようなことを明日菜たちがしたからやろ? エヴァちゃんから聞いたえ。明日菜たちが茶々丸さんに先に攻撃したんやろ?」

「それは……」

キティの奴、それも教えたのか！

「エヴァちゃんからエリオ君の話きいたけど、どこも悪いとは思わんだえ。それとも、明日菜は悪いことしたって思ってたへんの？」

「そりゃ、やりすぎたとは思っけど……」

「まあ、どう思つかは人それぞれと思うけどな。少なくとも、ウチはエリオ君が怒るのは当然やと思う」

「……」

「この話はこれでおしまい。ウチはエリオ君に魔法を習うから問題あらへん」

「し、しかしのう。エリオ君にも教師の仕事が……」

「それはネギ君も一緒やろ？　むしろ、担任な分ネギ君の方が時間あらへんと思うけど？」

「……」

近右衛門は何もいえなくなり黙りこんだ。

「あはははは、爺。貴様の負けだ。こいつはお前よりも狸だ。お前如きじゃ騙せんよ」

「狸やなんて酷いわー」

キティが笑い、心外だと言わんばかり木乃香が抗議するが、どこか友人同士で茶化すような雰囲気だ。

「わかった。木乃香と明日菜ちゃん、ネギ君はもうよい。ワシはエヴァと二人で話がある」

「「わかりました」」

ネギと明日菜が出て行き、木乃香も続いて出て行くこうとして振り返った。

「そうや。お爺ちゃん」

「なんじゃ？」

「ウチは西にも東にも所属せえへんからな。勝手に入れたらあかんえ」

「な！」

木乃香の言葉を聞いた瞬間、近右衛門が驚きで固まった。

まさか組織間の仲まで知っているとは思わなかったらしい。

どうせ、あとで上手く引き込めばいいとでも考えていたか、東に居ることで済し崩し的に東所属に持っていけばいいと考えていたのかもしれない。

「じゃ、よい魔法を」

「待つんじゃ、木乃香！」

木乃香はにこやかな顔で出て行った。

慌てて呼び止めようと椅子から立ち上がった近右衛門を無視して。

課外10時間目『悪企みの結果と予想外の事態』(後書き)

次回に続く!

課外11時間目『新しき悪企みと出張依頼』（前書き）

エリオと学園長の対談。

対談と書いて次回の伏線と読む……かもしれない。

課外11時間目『新しき悪企みと出張依頼』

3人が退出した後、学園長がエヴァに怒鳴った。

「エヴァ。これはどういうことじゃ！」

「どうもこうも、お前の計画通り木乃香に魔法の存在を知らせ、坊主の相手をしたただけだか？」

そんな怒声をキティはあつさり受け流した。

「ならば、なぜ木乃香が西東のことを知っておる！」

「さあな。そんなことはしらん。私は言われた通りにやっただけだ。文句を言われる筋合いはないな。お前の見通しが甘かったただけの話だろ。あのガキも私の元にすらたどり着けなかったしな」

「ぐっ……しかし、これでは」

「まさかとは思うが、契約を反故にしようと言っんじゃないだろうな？ もしそうなら、報酬以上の対価を覚悟してもらっぞ」

キティはギロつと近右衛門を睨んだ。

「……わかっておる。報酬はきちんと払おう」

エヴァに睨まれ学園長は、苦い表情で答えた。
もともと、俺は預けた魔法具の対象外なので、5歳の子供が睨んでいるようにしか見えず、これぼっちも怖くない。

「ならいい。それと、さつきから覗いている奴、そろそろ出てきたらどうだ？」

「なんじゃと！？ まさか西のスパイか！」

「その割りに、敵意は感じないがな」

どうやらクーガーの存在がバレたようだ。

もうネギも居ないことだし、少し早いが学園長室に向かうとするか。職員トイレの個室に入り、いつもの転移魔法で学園長室に入った。

クーガーには俺に注意が向いている隙に、ネギの監視に戻ってもらった。

「エリオ。お前だったか。しかし今の気配は……」

「エリオ君。事情はわかっておるかね？」

「大体はな」

キティの疑問を無視して学園長が問いかける。

俺としても、現状の切り札の1つである。クーガーの存在を誰かに知られるのは困る。

近右衛門にバレたら、また別の監視方法を使わないといけなくなるからな。

「木乃香との仮契約について説明してもらえるかの？ 木乃香は西の長候補であり、大戦の英雄の一人娘じゃ、それが東の魔法使いと仮契約するなど、西がどう勘違いすると思つとるんじゃない！」

「東の魔法使い？ 俺は関東魔法協会所属になったつもりはないぞ？ そうついた書類も書いてないし、加入すると言った覚えもない。勝手に所属にしないで貰おうか。今の俺は西にも東にも属さない無所属だ」

「くくく、予想通りの答えで清々する」

キティに読まれていたのは少し癪だが、まあ置いておこう。

「……たしかに東に所属はしておらなんだな。しかし、西洋魔法使

いが仮契約を行ったことに変わりはない。西が勘違いすれば戦争もありえるんじゃないぞ？」

「仮契約に関しては俺も納得していない。なんせ、捕縛結界で押さえられた上での契約だったからな。木乃香個人には俺も後で事情を聞くつもりだが、もう一人俺と強引に契約した奴がいる。まずはそこから事情を聞こうか？　なあ、エヴァ」

俺に向けられていた学園長の視線がエヴァに向けられる。

俺も、視線を学園長からキティに向けた。

「もう、放って置かれないうにエリオを縛っただけだ。また放置されては叶わんからな。本来なら仮契約でなく本契約にしたかった時間の都合上、仮契約にした。それだけだ」

「木乃香についてはどうなんじゃ？」

「知らんな。他人がどういう思惑で契約したかなど、わかるわけないだろ。あの様子じゃあ、私が巻き込む前から魔法のことは知っていたようだしな」

大浴場の話から察するに、事前に知っていたのは確かだ。なぜキティに協力していたのかは不明だが、何かしらの利害の一致があったのかもしれないな。

問題は、それが何なのかと言うことだが……まさか、俺目当てではないよな？

まさかな。さすがに自意識過剰すぎるか。

「では、木乃香は本人の意思でエリオ君と契約したということか？」

「それは間違いないな。私が木乃香を追った後、向こうから私に接触してきて、自発的に今回の件に協力を申し出たからな。大浴場での戦いは半吸血鬼化こそしていたが、精神支配はしていない」

「まさか、事件前からすでに魔法のことを知っておったとは……」

学園長は次々発覚する予想外の事態に頭を抱えた。

それにしても、一体いつから木乃香は魔法を知っていたんだ……

「仮契約のことはひとまず置いておくとして、エリオ君は木乃香をどうするつもりじゃ？」

「どうするもこうするも、まずは仮契約の事情の確認して、その後は木乃香が望むなら魔法を教えるつもりだ。魔法と言っても東（魔法）と西（陰陽術）。どちらを望むのかは木乃香次第。一般人が魔法に関わるなら止めるが、彼女は生まれながらにこちら側だ。そして本人に学ぶ意志があるなら、教師としてその覚悟を尊重する」

「……魔法のみにしてくれんかの？」

「断る！ それを決めるのは俺でも学園長でもない。むしろ、学園長は戦争を回避するために『魔法を教えるな』と言うべきだろう？ さっき、西が勘違いしたらどうすると言ったのは学園長だろ？」

陰陽術を教えた方が誤解は少なくて済むと思うが、それは木乃香次第だし。それとも、学園長は西と戦争したいんですか？」

「ふお！？ そんなことは考えておらんよ。そ、そうじゃな、決めるのは木乃香じゃな」

まったく、自分の陣営（関東）に引き込もうとしているのが丸わかりだ。

誰がそんなことに協力などするか。俺も木乃香も東の駒じゃない。

「話はそれだけか？」

「木乃香の話はコレでしまいじゃが、別件で少々頼みたいことがあるの」

「魔法がらみか？ それなら断るぞ。俺が学園長の指示に従うのは教師の仕事に関することだけだ。魔法関係は対等な取引ならまだし

も、顎で使われる気はない」

「魔法がらみ……と言えなくもないかのう。キティの報酬にも関わることじゃ」

「なに！？　どういうことだ。爺！」

キティが学園長の机に飛び乗り、胸倉を掴んだ。

「く、苦しい。今から説明するから放してくれんかのう？」

「ちっ、さあ話せ。今話せ。すぐ話せ！」

キティは仕方なく手を放して、続きを急かした。

キティの報酬が何なのかは知らないが、そこまで重要なことなのか？

「エリオ君ももうすぐ修学旅行があるのは知つとるな？」

「確か京都かハワイの2択で、クラスごとにアンケートを取ってどちらに行くか決めるんだったな。ウチのクラスもこの前アンケートをとって提出したけど、それが何か？」

「実はのう。京都市行きが中止になるかもしれんのじゃ」

話が進まなくなるので、飛び掛ろうとするキティを後ろから羽交い絞めにしておく。

しばらくバタバタ暴れていたが、顔を赤くして大人しくなった。

「先方がかなり難色を示してのう」

「先方というと、市役所かなにか？」

「いや、関西呪術協会じゃ。魔法教師が修学旅行の引率をすると言ったら断られてしもつた。京都は関西の本拠地じゃからな。国の機関への影響力も強い。おかげで、市役所も難色を示しておるんじゃない」

「それで俺にどうしろと？」

「なに、京都に行きたいというのは生徒たつての希望じゃ。無碍に扱うことは出来ん。そこで、エリオ君には旅行先の視察も兼ねて交渉して来て欲しいのじゃよ」

「……なるほど、魔法がらみと言えなくもないな」

「生徒の希望を尊重するためじゃと思つて行つてくれんかのう？」

魔法教師が問題なら俺とネギを省けばいいが、クラスの担任と副担任が不在で修学旅行やるのは無理だろう。

しかし、近右衛門がわざわざ魔法教師が京都に行くと、向こうに教えた辺りが怪しいな。

ネギに何かさせるつもりか？

「わかった。まあ、教師の仕事と言えなくもないし、引き受けよう」

「おお、引き受けてくれるか！」

「ただし、条件がある」

「む？ 教師の仕事なのに取引になるのかのう？」

「ええ、むしろ教師の仕事だからこそだ。いい加減、ネギにきちんと教師をやらせる。朝の職員会議の出席、放課後の書類仕事。ネギはほとんどやっていない。現状、俺が変わりにやっているのに出張で居なくなったら、その間に滞つたでは困るからな」

「そんなことでよいのか？ わしやてつきり無理難題でも言われるのかと思つたわい」

そんなこと？

なら始めからきちんとやらせろよ。

新田先生が何度も抗議しに行つてゐることは知つてゐるんだぞ！

「仕事の監督は新田先生か一般教師だ。それでもネギがサボり、生徒に何か不利益があつたり、監督者に魔法を使って都合のいいように改竄したら……」

「したらどうなるんじゃ？」

「修学旅行中、ネギの魔力を完全に封印する」

そう言うのと近右衛門の顔が青くなった。

やはり、何か考えていたようだ。

何を考えているかわからないが、魔法関係で何かさせようというなら大元の魔力を封じて仕舞えばいい。

まあ、ネギがどうなろうと生徒に被害が無ければどうでもいいが……この機会にしっかり教師の仕事をやってもらおうとしよう。

「……よからう。ネギ君には教師の仕事を徹底させよう」

「始めからそうしろ。俺もネギもココには『教師』をやりに来たんだ。それでいつから行けばいいんだ？」

「1週間後かのう。それまでに向こうの長に渡す書状も用意しよう」

「その書状の中身は俺も確認させてもらうぞ。修学旅行の許可を求めに行くのに、変な用事をついでに頼まれては面倒だからな」

「疑り深いのが。向こうの長はワシの義理の息子じゃ。プライベートな内容もあるんじゃないが……」

「そんなもんは、それこそ『プライベートな時間』にやれ。教師として行く俺に学園長のプライベートなんて関係ない。話がしたいなら手紙を郵送するなり、電話するなりすればいいだろう？俺が行くのは、向こうの組織にこちらの誠意を示すために行くのだと思っ
ていたんだが、俺の勘違いですか？」

もともと誠意もなにも、魔法的にはまったくの無関係なんだけどな
無所属だし。

一般組織的には、麻帆良の教師だから修学旅行の交渉に行く分には
問題ない。

「そ、そんなことはないぞ！」

「そうか。なら、中身を見ても問題ないよな？　あと、なにかしら条件を付けられた場合は？」

「それはエリオ君に一任するぞい。コチラの願いは、修学旅行に魔法教師2人を引率させることじゃからな。しかし、向こうの過激派がどう動くかわからん以上、自衛権は必須じゃ」

「交渉の案件は、魔法教師の同行許可と自衛の許可で間違いないな？」

「うむ。間違いない」

「わかった」

「エリオ！」

話を終えて部屋から出て行こうとすると、キティに呼び止められた。

「絶対に修学旅行の許可とって来い！」

「できるだけのこととする」

キティに返事を返して、学園長室を出た。

課外11時間目『新しき悪企みと出張依頼』（後書き）

コレにて独走の吸血鬼編は終了。

次章は木乃香修行編。

木乃香の魔改造をしつつ、関西と交渉したり、独走ルートの日常を書こうと思います。

その間に、成長ルートの吸血鬼編を終わらせねば（笑）

課外12時間目『仮契約の理由』（前書き）

今回から修学旅行までの空白期間の話になります。

前話のあとがきで書いたように、木乃香に修行をしたり、京都と交渉したり、独走ルートの日常を書くつもりです。

課外12時間目『仮契約の理由』

学園長との話を終えてから時間が経ち、帰りのHR。

大した連絡も無く、挨拶をして解散した。

生徒たちは部活に向かったり、寮に帰ったり、これから遊びに行く場所の相談をしたりと騒がしい。

「エリオ先生、ちょっと時間空いとる？」

教室を出て行こうとしたところで木乃香に呼び止められた。その後方からエヴァと茶々丸がコチラの様子を覗っている。おそらく、魔法関係のことだろう。

「まだこの後仕事があるから、あまり長くは取れないが、何か用か？」

「えーつとな。エヴァちゃんからあの件引き受けてくれるって聞いたんやけど……」

あの件ね。おそらく魔法の修行のことなのだろうが、秘匿意識はあるみたいだな。

ネギなら間違いなく『魔法』と口走っただろうが……

さて、どうするか。

「ああ、手品の授業か。まあ、その前になぜ習いたいのか聞かせてもらおうか。今すぐは無理だが、今日の夜は空いているか？」

「大丈夫やえ」

手品とは魔法を隠す隠語の1つで、その中でも一番わかりやすいものだ。

普通に『魔法』と言うよりも、『マジック』と言った方が『魔法』よりは『手品』と誤認されやすい。

そもそも、普段の会話で『魔法』と言う単語自体、あまり使わないしな。

「なら7時にエヴァの家でな。俺もい・ろ・い・ろ・と！ 聞いた
い事があるしな」

俺は色々の部分を強調した。

あの晩は少し頭に血が上っていたせいで、事情を聞きだす前に燃え
尽きさせてしまったからな。

今度はじっくりとお話しようじゃないか。

なあ木乃香、キティ……

「う、うん。わかったえ」

若干顔を蒼くしているが大丈夫だろうか？

まあ、体調不良程度なら俺謹製の回復薬で絶好調にしてから話を聞
くまでだが……

話を済ませ職員室のドアを開けると、やはりネギの姿はな……ネギ
が書類仕事をしていた。

「……」

ドアを閉めて、軽く頬を抓ってみる。

うん、痛みはある。夢じゃないな。

もう一度、ドアを開けてネギの机を見る。

ネギが書類仕事をしている。

再びドアを閉めて、教員用トイレの蛇口で頭から水を被り頬を抓っ
て、再度夢でないことを確認する。

確認作業を終えて、再び職員室のドアを開けた。

ネギが（以下略）

「おお、エリオ先生。今日は遅かったですな」

「新田先生、アレは？」

新田先生に話しかえられ、アレ（ネギ）を指差した。

「ああ、アレですか。実は、学園長から彼の監督を正式に頼まれましてな。1度の注意で聞かない場合は、報告するようになると言われましてな。学園長がまるで手のひらを返したような対応を始めたんですよ」

へえー、珍しく仕事が速いな近右衛門。

ご機嫌取りのつもりかねえ？

「ネギ先生はネギ先生で、私と入れ違いで学園長に呼び出されてから、急にやる気を見せ始めましてな。鬼気迫る勢いで仕事を始めたんですよ」

新田先生が嬉しそうに笑っている。

ようやく自分の言い分が通ったんだし、そりゃ喜ぶよな。

「それはよかったですね。ようやくコチラの言い分が通りましたね」

「ええ、本当にようやくですが。私はこれからビシビシネギ先生を指導していきますよ」

「よろしく願います。思いつきり教師として鍛えてやって下さい」

「よければ、エリオ先生も協力していただませんか？ 教師としてならまだしも、同世代の同僚はエリオ先生だけですから」

協力か……

新田先生には悪いけど、俺はネギを見限ってるんだよ。

せめて今回のコレが、俺の介入の結果ではなくネギの自発的な行動なら考えも変わるが、新田先生の話から推測するに、俺が出した条件を学園長が飲んだだけで、ネギ自身が自分から始めたわけじゃない。

言うなれば、小学生が親に言われて嫌々を宿題をするようなものだ。宿題をしなければ家から放り出すと言うような罰付で。ネギくらいの歳ならそれが当たり前だろう。

けれど、俺は今まで散々宿題をやるうと言ったが、ネギは聞き入れなかった。

罰が付いたからやる？ ふざけるな！ なら俺が今まで言ってきた事はなんだ！

結局、同級生の言葉じゃなく親の言葉でなければ、ネギは言うことを聞かない。

前にも生徒に言ったが、学ぶ気のない者に教える気はない。

それが授業のように教師の仕事なら別だが……

ネギに教えるのは教師の仕事でもないし、個人的には散々やってきた。

それを聞き入れないネギに、もう何も言うことはない。

「すいません。ありがたい申し出ですが、生徒から勉強会を頼まれました。今日も仕事が片付いたらソチラに顔を出す予定なので」

「勉強会ですか？ あまり特定の生徒に肩入れするのは……」

「ええ、わかっています。しかし、生徒の中には勉強熱心な生徒も居ましてね。私の受け持ち以外の教科や中学では習わないことを教えて欲しいと言われてるんです。無論、参加希望なら誰でも参加可能ですし、どんな教科でも見るつもりです。学ぶ意志のある生徒に

は出来る限り答えたいんです」

嘘は言っていない。

勉強（修行）をするのは事実だし、自分から学びに来ると言うのも本当だ。

これで、学校の勉強を教えれば臍肩になるだろうが……

実際に、勉強会を開いてもいいが……あいつらはきっと来ないだろうな。

自発的に勉強する意欲があれば、万年最下位になどなって居ないだろう。

「そうですか。わかりました。しかし、くれぐれも臍肩はいけませんよ？ 私達教師は生徒に対して平等でなければいけないんですから」

「はい。肝に銘じます」

新田先生からありがたい忠告を頂いて、俺は自分の机の書類を片付けに掛かった。

ネギが居るにも関わらず、担任用だ。

新田先生が居る以上、手違いという可能性は少ない。

多分、いきなり重要度の高い仕事をネギにやらせるのが不安だったのか。それともミスを直す暇が無いほど急ぎの書類なのか。どっちにしてもネギでは問題がある書類なのだろう。

さっさと終わらせて、キティの家に向かうとしよう。

仕事を終わらせて、そのままキティのログハウスに来た。

チャームを鳴らすと、相変わらずメイド服姿の茶々丸に歓迎された。テーブルに案内され、俺の反対側に木乃香とキティ。そして、俺の後ろに茶々丸が控えている。

……なぜ、茶々丸は俺の後ろにいるんだろうか？

まあ、それほど重要なことではないので放っておく。

「それじゃあ、まずはなぜあんなこと仮契約をしたのか教えてもらおうか。事と次第によつては、契約破棄もありうるからな。まずはキティからだ」

「私のはもう言っただろう？ お前が私を放つてどこかに行かないためだ」

なるほど、学園長室で言っていたことは真実か。

やはり、封印して放置したことをかなり根に持っているのか……確かに、あれは放置した俺の責任でもあるしな。

「俺がここから出て行く時には必ず声掛ける。それでもダメか？」
「ダメだ。すでにお前は一度約束を破っているんだ。そう簡単に信用してもらえないと思うなよ！」

最もな意見だ。

1度とは言え約束を破っている以上、信用に亀裂が生じるのは当然だ。

用心深すぎると言いたいところだが、キティの場合その用心深さが無ければ生き残れないような人生を送っているからな。

「仕方ない。仮契約のカードが信用の証になると言うなら好きにしろ」

「ふん。そういうことにしておいてやる。感謝するんだな。本当な

ら鎖でぐるぐる巻きにして監禁したいところだ」

いや、監禁は犯罪だぞ！

どれだけ俺を逃がしたくないんだ……

そこまで恨まれるようなことをしたか？

「ああ、マスターがあんなに照れて！」

「誰も照れておらんわ！ 大体、なぜ茶々丸がそっち側に居るんだ！ お前は私の従者だろう！」

俺の後ろに居る茶々丸に向かって、キティが吠えた。

「そちらはエリオ先生に叱られる側でしょう？ 私はもうあの晩に叱られ済みです」

確かに。

2人にはあの晩に聞けなかったことを聞くが、茶々丸に関しては言うべきことは言ったので、今回言うことは特にない。

「いや、しかし私達もあの晩に怒られたのに、またこうして怒られているんだぞ！？ なぜお前だけ！」

「マスターの命令に従っただけですから。本来は私は、エリオ先生の邪魔をする必要はありませんし、仮契約も行っていない。全てはマスターの指示です。それに関してはあの場でお叱りお受けしましたので、この場で怒られることはありません」

「私の責任だつて言うのか？」

「はい、当然です」

「言い切ったな！」

「ご安心を。もうマスターの指示であろうと、エリオ先生にご迷惑をお掛けするようなことはしません」

「茶々丸！ お前は私の従者だよな！？ そこはエリオに迷惑が掛かって私の指示を聞くといいところだろう？」

「エリオ先生がマスターの従者ということは、エリオ先生は同じ主に仕える従者。従者同士で足を引っ張り合うのは非効率的だと判断します。それに……」

そうだな。茶々丸みたいに四六時中キティの従者をやる気はないが、立場上では茶々丸と同僚になるな。

プライベートな関係がまた1つ増えたな。

「それになんだ？」

「私が私という存在で在るならば、嫌な事はきちんと断ることだと言われました」

「茶々丸が茶々丸として在るためか……」

「はい。マスターの言うことを聞くだけの人形であれば、私という存在は不要でしょう。私が不満であればAIの削除を……」

「あーそういう話はやめてくれ。茶々丸、自分のことを不要とか削除だとか言うな。お前は世界にただ一人だ。お前が消えると言うことは死ぬのと同じだ。自分から死ぬなんて言わないでくれ」

「大丈夫です。エリオ。私はそんなことしません。マスターが人形を望むなら、超に頼んでAIのないロボットを作ってもらいます。それと……もしも、マスターの従者をクビになったら私を貰ってくださいか？」

「な！？」

キティが驚いた顔をしている。

俺は茶々丸の意趣返しに乗ることにした。キティの所で茶々丸個人の意志が認められないなら、俺の所で迎えて認めるまでだ。

「貰うって……茶々丸は物じゃないんだから。ただ、茶々丸がキテ

イの傍に居られないなら好きにするといい」
「はい！」

もつとも、キティもそこまで薄情じゃない。
自分の従者が自由を求めているのに縛り付けるほど狭い度量じゃない。

「ちょっと待て！ 誰も人形を望んでいるなんて言っていないからな
！？ というか、エリオは渡さんぞ！」

そこは茶々丸は俺に渡さないと云うところじゃないのか？
キティの奴、パニくって頭がおかしくなってるな。

「茶々丸、キティをいじめるのも程々にな」
「はい」

さてと、キティをいじめるのはコレくらいにして、次は木乃香の番だ。

木乃香はキティ以上にわからない。
俺の知らない間に魔法の存在を知っていたし、東の西の争いのことも知っているような口ぶりだった。

どこまで知っているのか？
いつから知っていたのか？
何が目的なのか？

そして、なぜ俺と仮契約を結んだのか？
その辺りをきっちり聞かせてもらおう。

課外12時間目『仮契約の理由』（後書き）

次回は、木乃香のAFを公開予定！

課外13時間目『仮契約の期限（修正済み）』（前書き）

今回は大変遅くなりました。

木乃香のAFは最後にちよこつと外見だけ……

課外13時間目『仮契約の期限（修正済み）』

「それじゃあ、次は木乃香の番だ。が、その前にいくつか聞きたいことがある」

「なんやろ？」

「いつから魔法の存在を知っていた？」

「ウチの実家は、関西の長の家系やえ？ 知っとってもおかしくないと思うんやけど」

確かに、普通ならそうだ。

だが、近右衛門は『親の方針で魔法に関わらせんように生活させてきた』と言った。

親が教えていないと言うなら、木乃香に魔法の存在を教えたのは誰だ？

一番可能性があるのは近右衛門だが、それならあんな茶番に木乃香を巻き込んだりはしないだろう。

魔法を知らないと思ったからこそ、巻き込んで魔法の存在を教えようとしたんだ。木乃香が魔法の存在を知っている事を知っていたなら、巻き込まれる事はなかった。

となると、残るは自力で気付いたか親類以外の第3者に教えられたか、のどちらかになる。

「たしか木乃香は小学校から麻帆良に来てたんだよね？」

「そうやえ」

「なら、実家に住んでいた時に魔法のことを知ったのか？」

「ちやうえ。魔法のことを知ったんは、麻帆良に来てからや」

と言うことは、西の人間から魔法を教えられた可能性は少ないな。麻帆良に来てからでは西の人間との友好的な接点など皆無だろう。

攫って利用しようとするような接点ならいくらでもあったかもしれないが、それで魔法の存在を知ったなら近右衛門なり親なりに問いただすだろう。

仮に友好的な接点があったなら、木乃香はとくに西の所属になっていたはずだ。

そうなれば、東所属の近右衛門に話さなくても、西の長を勤める親には話すだろう。

しかし、職員室の話を聞く限り、それもなさそうだ。

キティの言ったように、木乃香が俺の予想を超えるような狸で無い限りは……

「魔法の存在はどうやって知った？ 誰かに教えてもらったのか？」

「ちやうえ。自分で気付いたんや。先生も学園全体に認識阻害の結界が張ってあるのは知つとるやる？ そんで、結界があるからって調子に乗って常人離れた力を発揮する阿呆が居ることも」

「ああ、知っている」

認識阻害があるからと言って、魔法使いの常識で行動する奴は多い。人を素手で吹き飛ばす生活指導員やら遠当ての使い手に、忍ばない忍者など。

認識阻害の存在を知っているかどうかはさておき、自分が一般人から逸脱していると言う認識を持たない非常識人。

まあ、たかだか9歳で教師をやっている俺が言えたことじゃないが、俺は子供教師であることを除けば外の常識に従っているつもりだ。それに飛び級子供教師なら実現できなくはない。

異常であることに違いないが、現実可能な異常だ。非現実の異常である魔法とは次元が違う。

「認識阻害は、常人離れた力（魔法）を見えやなくするわけやない。それを見てもおかしいと思わなくするだけや。結界の中でも、

『おかしいもん』を『おかしい』と理解できれば認識障害の意味はない」

「つまり、自力で認識障害を破ったと？」

「そうや。結界の力を過信して力を隠さへん阿呆のおかげで、気付けたわ。『アレはおかしい』ってな」

木乃香の言が本当かどうか分からないが、可能ではある。

認識している人間に、認識障害は効きにくい。

魔法を知っている人間が、認識障害に抵抗しなくても効果を受け付けないのは、魔法を魔法だと知っているからだ。

でなければ、抵抗できない一般人は魔法認識者になることが出来ないはずだ。

魔法の括りを大きくして、魔法を常人離れた力として現実的に認識すれば、千雨のような特異体質でなくとも認識障害を破ることは出来る。

しかし、一般人にとって空想の産物である魔法を現実的に認識するのは簡単じゃない。

それこそ盲信レベルで信じない限り、認識障害に影響を及ぼすことは不可能だろう。

もしくは、言われたことを疑いも無く心の底から信じる天然か、過去に認識障害の影響外で魔法を見ていない限り無理だ。

前者はそこまで深く信じられれば盲信と変わらないレベルの認識力だし、後者であれば過去に認識したせいで認識障害の影響を受けないだろう。

「それならなぜ今まで黙っていた。学園長の様子だと、魔法認識者だと思っていなかったようだが？」

「黙ってたんは、東と西の争いの事を知ったからや。ウチが魔法認識者なんてお爺ちゃんが知ったら、絶対に東に引き込む気に決まっとる。現にそうしようとしたし。ウチがどっちかの組織

に入ったら、どっちに入っても家族の一部を敵に回さなあかんくなる。そんなんは御免や」

「なるほど、それで東と西の争いを教えたのは誰だ？ 魔法認識者になっただけでは、東と西の争い情報にはたどり着けないぞ？ 魔法組織のことを知っている者に接触しなければ得られない情報だ。そんなことを聞けば、木乃香が魔法認識者だと相手に教えているようなものだ。もし、そんなことをすれば、東西組織のどちらかに伝わるだろう」

「それは聞いたんが、組織に所属しとつたらの話やろ？」

にこつと笑う木乃香。

今の話は聞いた相手が組織に所属していた場合の話だ。無所属となると話は変わる。

所属なら、一般人だと思われていた木乃香（英雄の娘）が魔法認識者だと言う情報は、組織にとって大変な価値があるだろう。

だが、無所属であればそれほど高くは無い。せいぜい、組織に交渉を持ち掛ける際の手札の1つにしかない。

「…………キティか」

「正解や」

「おい、近衛！ 貴様、約…………」

「茶々丸さん。エヴァちゃんの口塞いどいて」

「はい」

「茶々丸、貴様まで…………ムガー！」

木乃香が茶々丸に命じてキティの口を塞がせた。

なんだかキティに対する茶々丸の扱いが、どんどん悪化している気がするのはい気のせいかな？

まあ、自分で考えて行動すると言う意味ではいい事なのかもしれないが…………

「ウチはな。魔法認識者になってから、一般人と魔法使いの区別が付くようになったんよ。気配って言えばいいのかな？　そういうもんが感じられるようになって、一番最初に気配の違いに気付いたんがエヴァちゃんやった。お爺ちゃんの気配の違いに気付いたんはその後や。もともと、その時にはエヴァちゃんから魔法に関する話を聞いた後やったから、気配を感じやんでもわかつたけどな」

「それで今まで学園長に相談せず、魔法認識者であることを隠していたと？」

「そうや。まさか、お爺ちゃんが強引に魔法認識者にしようとするとは思わんかったけど」

魔法を一般人が知った場合、興味本位で首を突っ込むか、魔法と言う異常を恐れて関わらないようにするか、のどちらかだ。

千雨は後者だったが、木乃香の場合は前者だ。

首を突っ込むなら、情報を得るのが早道だ。まして、一般人と魔法使いの区別が出来るなら、聞く相手を間違える事もない。

魔法使い相手に、魔法の存在をしていると言えばあっさり折れるだろう。一般人が聞くならいくらでも誤魔化すだろうが、潜在的な魔法関係者が相手に、確信を持って聞かれれば誤魔化しは無意味だと悟るだろう。

魔法を知っていてもおかしくない存在が、魔法のことを聞くのはおかしいことではないからな。

それでキティから話を聞いて東と西の争いを知り、魔法認識者であることを隠したのか。

運がいいと言うかなんというか……キティ以外に聞いていれば、組織に引き込まれていただろうに。

「要約すると、木乃香は中学生になってから魔法の存在に気付き魔法認識者になった。そして、エヴァから争いの話を聞き、魔法認識

者であることを隠した。こう言うことか？」

「そうやえ」

なるほど。

確かに筋は通っている。

だが、それが真実だと言う証拠は無い。

さっきのキティの反応も気になるしな。とは言え、この場でこれ以上追求するのは無理だろう。

後で、木乃香が居ないところでキティに改めて話を聞こう。場合によつてはどちらかにカマ掛けて、真偽を確かめよう。

「それでは本題だ。なぜ仮契約あんなことをした？ 魔法を習うだけなら必要ないだろう？」

「そんなことあらへんよ。先生の従者になったから、お爺ちゃんもネギ君とくつつけんのをあつさり諦めたんや」

笑顔で俺の質問に答える木乃香。

なるほど、確かに近右衛門は木乃香の魔法教師役にネギを推していたな。

それを俺との仮契約を理由に断つたが、俺としては仮契約の件よりもネギは（一応）担任だから忙しい（はず）件の方が有力な気がするんだがな……

「それなら、もう解決したな。爺から許可を取りやすくするために必要だったなら、もう役目は果たした以上、契約を維持し続ける必要は無いな。俺に師事するのと俺と仮契約し続けることは別の話だ」

どっちにしても俺が教えることになったなら、もう仮契約を続ける必要は無い。

「それだけやあらへんよ。ウチの周り、西も東にもに組してへんていう証明になる。先生はどっちにも組してへんやろ？」

「それならキティもそうだろう」

無所属の証明と言うなら、俺ではなくキティとの仮契約でも可能だ。それに女同士な分、男とするよりは精神的に楽だろう。

女性にとってファーストキスは大事なものだと聞くし。

女同士ならお遊びで済むかもしれないが、相手が男となるとそうはいかないだろう。

それがいくら子供でも異性として見られるなら……まさか、男と見られてないとかないよな？

「エヴァちゃんは、封じられとる間に組員同然の扱いをされとるからあかん。実際にはそんなことあらへんけど、周りはそう思わんし、エヴァちゃんの従者やと良くて吸血鬼に誑かされた娘、悪くて共犯者扱いや。エヴァちゃんの迷惑はもとより、どっちの場合でも『正義』を掲げる魔法使いに大義名分を与えてまう」

確かにあり得る話だ。

キティが木乃香……西出身とは言え、大戦の英雄の娘を従者にすれば東所属の正義を掲げる奴らは黙っていないだろう。

西は西で、長候補筆頭を元賞金首の従者を続けるなど許さないだろう。

キティに関しても、近い者であれば東に属していない事を知っているだろうが、東の内情を知らない西はもとより警備の協力をさせてきた東も、自分たち側だと勝手に思い込んでいるだろうしな。

「なるほど。まあ、俺を相手に選んだ理由はわかった。けれど、続ける理由にはならない。木乃香が無所属でいることで、両組織に同じメリット・デメリットがあるなら、わざわざ仮契約をしなくても、

そう言えいい。周りがなんと言おうと自分は組織と無関係だと」

「もちろんそれだけやない。仮契約するとアーティファクト言うんが使えるようになるんやろ？」

「出るかどうかは主と従者の力量次第だし、何が出るかわからないがな」

「それでも、出れば力になることに変わりはないやろ？ 今のウチは魔法使いやない。魔法の存在を知っているただ一般人や。エヴァちゃんの話やと魔力はたくさんあるらしいけど、使いこなせやんだら宝の持ち腐れや。自分を守る力がなく利用価値が高いウチを組織は放っておくやろか？」

「十中八九、放っておかないな。誘拐なり洗脳なりなんなりして組織に引き込もうとするだろうな」

「やろ？ さつき先生はウチの意志次第で所属はどうにでも出来るって言ったけど、ウチの意志すら奪われる可能性がある。やから、先生と契約してウチの意志以外に無所属であることの証明と自分の身を守る力が欲しかったんや」

「俺の意志を無視してまでか？」

「それは悪いと思うとる。でも猶予がなかったんや。あの時せんだら今頃ウチは東に組み込まれて、ネギ君に魔法を教わったと思っ」

「それで証明と力を持ち続けるために契約を続けて欲しいと言うわけか？」

「そうや。自分勝手なことを言っとなのは重々承知や。それでもお願いします。ウチとの仮契約を続けてください」

さて、どうするか……

木乃香の言うことには一理ある。

意志次第でどうにでもなるということとは、逆に意思さえなんとかしてしまえばどうにでも出来るということだ。

意志を奪う魔法、傀儡にする魔法なんていくらでもある。

もちろん、どれも法に触れるが、魔法に頼らずとも薬でも可能だ。手段を挙げればキリがないほどある。

「木乃香。お前は自分の身を守るために俺と契約し、そして続けて欲しいと言ったな」

「そうや」

「なら、なおのこと契約を解くべきだ」

「どうということなん？」

「俺に関われば、今抱えている問題以上の危険に巻き込まれるかもしれないと言うことだ。確かにA Fは簡単に手に入る強力な力だ。だが、仮契約にリスクがないわけじゃない。契約を結ぶと言うことは主と確固たる絆を持つということだ。それはリスクにもリターンにもなる。リスク面言えば危険に巻き込まれた時の扱いの間違いだ。主従契約を結んでいなければ言い逃れが出来る。『脅されて無理やり従わされた』とでも言えば、情状酌量の余地があるしな。だが契約を結んでいれば、無理やり契約されたとしても言い分が通ることはないだろう」

キティと茶々丸がいい例だ。

茶々丸がどれだけ善人でも、キティの……悪の魔法使いの従者というだけで悪者にされる。

「その危険って言うのはなんなん？」

「さあな。それは俺にもわからない。だが人間、生きていく中で大なり小なり他人に恨みを買う。正当なものもあれば理不尽なものもあるだろう。従者になるということは、その恨みを『従者だから』と言う理由だけで被ることになる。それは主にも言えることだがな」
「でも、それは全ての契約に言えることやろ？ そんなこと怖がったら契約なんて出来へんえ？」

「だから、主従は降りかかる危険に共同で対処する。だが、それは

お互いが認めた上で契約を結んだ場合の話だ。俺達は違う。木乃香が一方的に契約を結び、一方的に契約を続けたいと言っているだけだ。そして、俺は木乃香に従者にする気はない。つまり契約が成り立っていない。木乃香が俺を利用していると言ってもいい」

「……」
それを聞いて、木乃香は俯いて黙り込んだ。
俯いているので表情は見えない。

「だが、契約が必要だと言うこともわかった。だから、俺からは破棄しない。木乃香が破棄したいと願うまでな」
「ホンマに!？」

俯いていた顔を上げて、驚いている。

「ただし、さっきも言ったように俺は木乃香に従者にする気はない。普通の主従のようにお互いの問題に協力して対処する気はない。だから、俺の事情で危険に巻き込まれても関知しないし、木乃香の事情に主として関わる気もない。それが嫌なら契約を破棄することだ。リターンを得るなら、相応のリスクを覚悟しろ。俺からはそれだけだ」

「それで十分や。ウチは先生を自分のために利用しとる。その上、助けて欲しいなんて望まへん。むしろ、ウチが先生を助けやなあかんくらいや」

木乃香が俺を助けるねえ……
自分の身すら守れない雛が言っても説得力ないな。まあ期待しないで待っておこう。
もっとも、守られる必要はないかも知れないがな。

「それじゃあ、アーティファクトを出せ。どんなものか確認するから」

「……どうやって出すん？」

それは知らないのか。

「契約カードを持って『アデアット』と唱える。しまう時は『アベアット』だ」

木乃香にアーティファクトの出し方を教えると、さっそく仮契約カードを出して呪文を唱えた。

「『アデアット』」

仮契約カードが光り、カードの代わりに現れたのはトンカチと古びた書物だった。

課外13時間目『仮契約の期限（修正済み）』（後書き）

微妙な出来です。

もしかしたら大幅に手直しするかもしれません。

次回は週末に更新できるといいな！。

最近休みが不定期orなしが多いので……

課外14時間目『木乃香のアーティファクト』（前書き）

今回は木乃香のA Fの正体がわかります。
全てではありませんけどね。

課外14時間目『木乃香のアーティファクト』

おいおい、ちょっと待て。なんでこれが出てくる!?

「先生、どうかしたん?」

「いや、かなりレアなアーティファクトが出て驚いた」

「そんなに珍しいもんなん?」

その辺りの事は知らないのか。

「カナヅチの方は調べないと分からないけど、そっちの本は……
・・」

「おい! ちょっと待て! 何でアーティファクトが2つも出てるんだ!？」

キティはアーティファクトそのものよりも、2つ出たことに驚いているようだ。

まあ、2つも出るなんてまずないからな。

「ほえ? 普通なんちゃうん?」

「アホか! モノ次第で一国を滅ぼせるような物が出ることもあるのに、2つも出てたまるか!」

「出るんだからしょうがないだろ。俺が契約すると大抵こうなるんだ。いつもって訳じゃないけどな」

1つしか出なくても、かなりレアな物が出るだけだな。

だから、みだりに仮契約をしたくないんだ。

何代か前に、アーティファクト欲しさにMMから狙われたこともあったし。

「キティも木乃香もあまり他人には言いふらすなよ？ 知られると面倒だ」

「確かにこんな事が公になったら、間違いなく利用しようとする輩が沸くな」

「2つも出るんはそんなに珍しいん？」

「100年に1組いるかと言ったところだな。もっとも、アーティファクトは2つとも機器ランクだがな」

「機器ランク？」

「アーティファクトには、能力の強さ別にランクがあるんだ。ランクが高ければ高いほど高性能な物とされているが、ランクなんて大して当てにならない。状況次第で向き不向きがあるし、制限きつかったり、真価を発揮するのが難しかったり、使い道が極限られていたりと色々問題があったりする」

「ほえー」

ちなみに、ランクの名称は上から順に『神器』『祭器』『魔器』『機器』とある。

ちなみに、『機器』の下にアーティファクトが出ない仮契約カードを『無器』と蔑称したり、クラスに拘わらず、もの凄く使える物を『万器』^{ばんき}と呼んだりする。

「どちらも機器クラスではなさそうだが……」

「ああ、片方はおそらく魔器クラスだ。もう片方もそれ以上だな」

『魔器』は、高名な術者が作ったとされるアーティファクトだ。

『機器』クラスなら、同じ物が複数人がアーティファクトとして所持しているが、『魔器』クラス以上の所持者はオンリーワンだ。

所持者が死ねば、再びアーティファクトに見合う契約者が現れるまで姿を消す。

物によつては数百年世に出ていない物もあると聞く。もつとも、単に把握していないだけかもしれないが……

「2つ出てきた上に最低でも魔器クラス。私も主従交換して契約するべきか？」

「断る！　そうやってアーティファクト目的で契約しようとする奴が居るから知られたくないんだ」

「す、すまん」

シユンとするキティ。

まあ、悪気があるのは分かるんだがどうしても口で言われると嫌悪感があるんだよな。

だから、歴代の従者と契約する時も、俺から契約を持ちかけていたし。みんな契約した後は、アーティファクトを出して驚いていたな。

「それでウチのあーていふあくと言っくんはなんなん？」

木乃香が話題を戻した。

あのまましんみりした雰囲気よりはいいか。

元々、木乃香のアーティファクトを調べるのが目的だしな。書物を手にとって、中身の流し読みした。

「こつちの書物だけど、多分『占事略決』だ」

「……」

「????」

キティは啞然としているし、木乃香はどんなものなのか理解していないようだ。

まあ、縁のない奴には聞いたことのない書名だろう。

なんせ平安時代に書かれた物だし。

「占事略決と言えば、平安時代の陰陽師・阿部清明が書いたとされる書物だ。簡単に言えば、占いと陰陽術の教科書だ」

「へえ、占いの教科書か。本格的な占いの仕方とか載っとるかな？」

「なんでそんな簡単に流す！？ 写本ならともかく、本人直筆の原典だぞ！ 間違いなく魔器の中でも上位にはいるぞ」

「だから？」

「だからって、お前」

「道具は所詮道具だしな。それに教科書なんて覚えたらいらないだろ。キティは初級魔法の教科書なんて後生大事に持っていたりしないだろう？」

「それは確かにそうだが……」

「そんなわけで、書物の方はちょっと珍しい陰陽術の教科書だな」

書物の方は、価値こそ高い物の物自体に力があるわけではない。

中身の価値は、陰陽術を使う物なら喉から手が出るほど欲しい物だが。

問題は、金槌の方だな。

片面は平らだが、もう片方は米字に割れて先端が尖っている。

なにより、槌から黒に近い深紫色に鈍く光っている。オーラが上がっていると言うか。

禍々しい雰囲気伝わってくる。

「こっちはなんなん？」

「多分、武器だと思うけど……」

「何と言うか。禍々しい雰囲気だな。見た目が小さいからそれほど驚異には感じないが」

「じゃあ、試しにエヴァちゃん叩いてみるえ」

「はっはっは！ そんな物当たるわけないだろう。真祖の障壁をな

めるなよ」

木乃香が金槌を持ち上げて、キティ目掛けて振り下ろした。パリーとガラスを叩き割るような音と共にキティの障壁をうち砕いて、頭に当たった。

「「え？」」

今、障壁を砕いた？

「木乃香、魔法使ったか？」

「そんなん使ってへんえ。ただ金槌で叩いただけや」

となると、金槌の能力か？

障壁突破と言うよりは、障壁破壊らしいが……
真祖^{キティ}の障壁をあっさり壊すようだし、並の障壁ではひとたまりもなさそうだな。

「少し調べさせて貰うぞ。『見て視て観よ《解析》』」

《解析》の魔法を掛けてみたが、弾かれた。

生き物相手ならともかく、アーティファクトに弾かれるほど柔な魔法を使ったつもりはない。

本気でこそないが、それなりに魔力を込めたんだけどな。

全力で調べてみるか。それとも、木乃香自身に調べさせるか……

よし、木乃香のアーティファクトなんだし、木乃香に調べさせよう。

「ダメだ。弾かれた」

「……私もダメだ」

キティも魔法を使ったようだが、俺と同じく弾かれたらしい。
木乃香はなんの事だかわからなそうな表情をしている。

「どうかしたん？」

「俺もキティも調べる魔法を掛けてみたけど、どちらも抵抗レジストされた」
「それって凄いいん？」

「魔法使いならともかく、魔力が込められているとはいえ道具が抵抗するなんてよっぽどだ」

「へえー」

「魔法で調べるのは、木乃香に任せる。一応、別口で調べてみるけど、自分のアーティファクトなんだから自分で調べることに」

まあ、調べるために使う魔法は俺が教えるんだが……

「はい」

そんなわけで、木乃香のアーティファクトは、陰陽術の教科書と障壁破壊能力(?)付きの金槌だった。

課外14時間目『木乃香のアーティファクト』（後書き）

次回から木乃香の修行に入りたいと思います。

修学旅行までにネギに勝てる程度にはしたいと思っています。

ところで

クリスマス記念とかお正月記念とか記念物の話を書いた方がいいですかね？

クリスマスは書けるかどうか怪しいですが……（仕事の意味で）

クリスマス番外編アンケート（前書き）

アンケート告知！

クリスマス番外編アンケート

クリスマス番外編は親友シリーズの主人公、エリオット・クルーデルを能力や記憶をそのままに異世界（ネギま！以外の作品世界）に送った話を書こうと思うんですが、どの作品にしようか悩むのでアンケートを取りたいと思います。

締切は24日0時とさせていただきます。

誰も投票しなかったら、作者が勝手に考えます。

メッセージが可能な方はメッセージでお願いします。

結果は投稿を持って公開したいので！

ああ、メッセージが無理な方は成長か独走のどちらかの感想に投票をお願いします。

突発的な思い付きで、ご迷惑をお掛けしますが投票していただければ幸いです。

では、よいクリスマスを！

クリスマス番外編『第4次聖杯戦争参戦』

（前書き）

ギリギリセーフ！

まだクリスマス中です。

今回の番外編はタイトルから判るように、エリオが第4次聖杯戦争のサーヴァントとして召喚されるお話。
さて、クラスとマスターは誰かな？

クリスマス番外編『第4次聖杯戦争参戦』

冷たく暗い地下の底で、一人の男の声が響く。

「閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する」

男は片目から血を流しながら、これからの戦いを思う。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

後ろに佇む爺の手から、一人の少女を救うために始まる。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪と成る者」

自らの行いに悔いはない。

「されど、汝はその目を混沌に曇らせるべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。

我はその鎖をたぐる者」

だから、その身、その命の総てを賭けて賽を投げた。

「汝、三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

もう後戻りはできない。男が歩む道に先はなく、光もない。

男は、ただ暗く先がないと知りながらも、深淵に歩みを進める。
だが、深淵に向かった男は、その先で光を得た。
その光は、冷たく暗い地下と光無き道を歩む男を照らした。

side out

雁夜side

視界が光に包まれるのを見て、私はその場に膝をついた。

サーヴァントの召還に魔力を根こそぎ奪われ、その魔力を生み出すために刻印虫が私の肉体を喰らう。

今の私は搾り滓も同然だ。自らの足で立つことすらできず、呼吸をするだけで体に激痛が走る。それでも、桜ちゃんを救う唯一の手段であるサーヴァントを確認しようと首から上を動かし目を凝らす。

「な……！？」

そして、私は驚きに目を見開いた。

そこにいたのは、スーツを纏った少年……いや、子供と言っても通じるような男の子だった。

まさか、私は召還に失敗したのか？

慌てて呼び出したサーヴァントのステータスを確認し、絶望した。

□□□□□□□□□□

クラス：バーサーカー

マスター：間桐 雁夜

属性：善・狂

ステータス

筋力：F 耐久：F - 敏捷：F 魔力：E 幸運：E 宝具：×

クラススキル

狂化：E

狂化の恩恵を受けない代わりに、正常な思考力を保つ。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

狂化による強化はなく、ステータスも貧弱。

バーサーカーとは名ばかりの雑魚だった。

「召還の声に呼ばれてきたんだけど、君が召還者で間違いないかな？」

「あ、ああ……」

「理性を保つバーサーカーじゃと！？ しかし、このステータスではのう……」

後ろで臓硯がバーサーカーでありながら理性を保っていることに驚き、次いで落胆した。

おそらく、俺に寄生している刻印虫（使い魔）を通してステータスを見たのだろう。

確かに、あんなステータスじゃあ聖杯戦争を勝ち抜くのは不可能だ。すまない。桜ちゃん。俺は……

「では、名前を教えてください。まだきちんと契約できていないからね」

「間……桐雁……夜」

息も絶え絶えの状態で、私は自分の名をバーサーカーに告げた。

「間桐 雁夜か。俺はエリオット・クルーデル。以後、よろしく頼む。マスター雁夜」

お互いに名前を交換し、正式に契約が結ばれた。
バーサーカーの真名を知ったことで、ステータスが更新された。

「「なっ!？」」

□□□□□□□□□□

真名：エリオット・クルーデル

クラススキル

狂化：E（A+）

狂化の恩恵を受けない代わりに、正常な思考力を保つ。

暴走時にランク上がり、全パラメーターを2ランクアップするが、マスターの制御さえ不可能になる。

固有スキル

単独行動：A（A+）

心眼・真：A（心眼・偽：A）

魔法：A（C）

感卦法：B

異形：B

宝具

????

ランク不足により使用不可

???

ランク不足により使用不可

□□□□□□□□□□

狂化に暴走時のランクが付け加えられ、固有スキルが軒並み高ランクだ。

これで、パラメーターさえ高ければ……

いや、暴走させれば勝ち目はあるかもしれないが、私にそれを維持するだけの魔力も制御する精神力もない。

落ちていたところを上げて、また落とされた気分だ。

せめて、私に魔術師として戦えるだけの力があれば……

「カ…… かかかかか！ 雁夜よ！ よくやった！ お主は聖杯以上の宝を引き出しおったわ！」

「なんだと？」

醜悪な老魔術師が顔を歓喜に歪め、声を上げて笑った。

こんな最弱のサーヴァントと言っても過言ではない者を呼び出して、何故誉められる？ 臓硯が私を誉めるなんて事は今まで一度もなかったというのに……

「バーサーカーとして呼ばれながら理性を保ち、魔術ではなく魔法を習得しているとは！」

「爺。貴様は何者だ？」

バーサーカーは杖を突きながら近寄ってくる蔵硯に警戒の視線を向ける。

しかし、蔵硯は気にし様子もなく、歩みを続ける。

いくらサーヴァントと言えど、あそこまでステータスが低くては蔵硯には勝てない。

Fランクの能力は、そこらの一般人と変わらない程度の強さでしかないはずだ。

一般人程度の力で、臓硯に勝てるはずがない。

「僕はそやつの祖父、間桐 蔵硯と申す」

「それでその祖父殿が私になにかご用でしょうか？ 私は早々にマスター雁夜を治療しなければならないのですが」

「その必要はない。そやつのような出来損ないの主では、お主の力を完全に発揮出来んじやろう？ そこで、僕がそやつに変わってお主の主になり、代理で参加しようと思つてのう。どうじゃ？ お主にとつても悪い話じゃなかるう？」

確かに、私じゃあバーサーカーを弱体化させ、最低のステータスを持つバーサーカーに対してすら俺は足手まといになる。

だが、どんなに弱くてもバーサーカーは桜ちゃんを助ける唯一の手段なんだ！

臓硯に取られるわけにはいかない！

激痛が走る体に鞭を打って立ち上がる。

「バーサーカーは渡さない。私は、聖杯を手に入れて桜ちゃんをあつちの地獄から救い出すんだ！」

「マスター雁夜はこうおっしゃっているんで、申し訳ありませんがその話はお断させていただきます。それに、私も今のマスターを気に入っていますから」

バーサーカーが勧誘を断ると、臓硯の目が私の方に向いた。

「ほう……随分と大言を吐くものよ、雁夜。死に損ないのお前など、ワシの手に掛かれれば一瞬で葬れるというのが理解出来んわけではあるまい？ 残り僅かとは言え残った命をここで無様に散らすか

？」

臓硯からおびただしい殺気が私に向けられた。

「祖父殿。サーヴァントとして、マスター雁夜への攻撃を見逃すわけにはいきません」

一瞬怯んだ私と臓硯の間にバーサーカーが入り、殺気から私を守る楯になった。

「やって見るよ。くそ爺！ その前に、令呪でバーサーカーを自害させてやる！」

バーサーカー越しに臓硯を睨みながら、そう宣言した。

バーサーカーには悪いが、おいそれと桜ちゃんを救う可能性を渡すわけにはいかない。

さすがに、自害させられてはかなわないのだろう。

臓硯は不機嫌な表情で考え込み、すぐに口を開いた。

「雁夜よ。貴様は、あの小娘を助けるために僕の命令でバーサーカーを呼んだな。では、バーサーカーを僕に寄越す対価として、あの小娘をくれてやる。それなら文句はあるまい？ 勝てもしない戦争に向かい、欲する物を得られぬよりは、戦う手段を僕に寄越し、欲する物を得られる方が良いじゃろう？」

「っ！」

バーサーカーと桜ちゃんを交換しろと言うのか？

私が渡さないと断ったとはいえ、私のせいで弱体化しているにも関わらず臓硯の勧誘を断り、私を気に入っていると言ってくれたバーサーカーを犠牲にしろと……

「バーサーカー……」

「マスター雁夜。お前はお前の信念に従え。俺はそこを気に入っているのだから」

私の信念。

大切な者を守るために、それ以外を、自分自身を犠牲にして守る。その信念に従うならば、答えは決まっている。

「すまない。バーサーカー……蔵硯、桜ちゃんに寄生させた虫を総て出せ！そして、今後一切桜ちゃんに近寄るな。虫を寄生させるな！それがバーサーカーのマスター権を譲渡する条件だ！」「力力力力力！良かるう。では、さつさと令呪を寄越せ！」「ダメだ！先に桜ちゃんの虫を出してからだ」

不機嫌そうな表情を崩さない蔵硯が杖で地面を突くと、丁度バーサーカーの真上に、虫に包まれた桜ちゃんが落ちてきた。

バーサーカーは虫ごと桜ちゃんを抱き留めた。

バーサーカーの腕の隙間から、虫が地面に落ちては消えていく。

虫が総て消え、バーサーカーの腕の中には無表情で虚ろな目をした

桜ちゃんが残った。

桜ちゃんは、そこから私や蔵硯、最後にバーサーカーを見て目を閉じた。

「約束通り、虫は取り除いた。なんなら、バーサーカーに確認させたらどうじゃ？魔法が使えるならこの程度造作もないじゃろって」

「バーサーカー、頼む」

「了解した『生体走査』」

バーサーカーは桜ちゃんを抱え直し、額に手を触れて、目を閉じた。バーサーカーの手が光り、しばらくして収まった。

「右の太股と左の肩胛骨の下に2匹ずつ居るな」

「どういうことだ！ 約束が違うぞ。臓硯！」

「かかか！ よくぞ見抜いた。これしきも見抜けずして何が魔法の使い手か。合格じゃ」

臓硯が床を一度突くと、桜ちゃんが目を見開いて下を向いた。そして、4匹の虫を吐き出した。

「これで本当に総て取り除いた」

もう一度、バーサーカーに確認させる。

「大丈夫だ。もう異物はない」

そう聞いて安堵した。これで桜ちゃんは地獄から解放される。

「すまない。バーサーカー」

改めて、謝る。

おそらく、臓硯は聖杯戦争になど参加しないだろう。

おそらく、スキル：魔法の知識が狙いだろう。

サーヴァントに対する絶対命令権を持つ令呪が渡れば、どんな命令も拒否できない。

俺は桜ちゃんを助けるために、英霊を犠牲にした。

その罪は俺が一生背負うべきものだ。

「気にするな。マスター雁夜。ああ、そうだ。マスター権限が移ったらマスター雁夜の虫も取り除こう。その少女と共にいるなら、虫は邪魔だろう？」

バーサーカーは最後まで私を責めなかった。

それどころか、私の身を案じてくれさえした。

本当に、私はいいいサーヴァントを持った。だからこそ悔しい。自分の望みを叶えるために、バーサーカーを犠牲にしなければならなかったことが……

「さあ、令呪を持って命じよ！ 儂を新たなマスターにするとな」

「バーサーカー。令呪を持って命じる。新しき主、間桐 蔵硯のサーヴァントになれ！」

私の手から令呪が総て消え、蔵硯の手に二画の令呪が刻まれた。

「マスター蔵硯。短い間だとは思いますが、よろしくお願いします」「うむ」

「それでは、雁夜に寄生する虫を駆除します。よろしいですか？

マスター蔵硯」

「許可しよう。ただし、魔法を使うことが条件じゃ」

「了解しました。『《呪殺》』」

「ぐ！ ぐあああああ」虫が暴れながら移動する。そして、桜ちやんと同じように地面に吐き出した。

吐き出された虫は苦しそうにのたうち回りながら徐々に動かなくなり、完全に動かなくなっただけで灰になった。

「かかかかか！ かなり強い虫を寄生させたというのに、宿主を殺すことなく殺すとは、さすが魔法のつ！？」

ぼとりと何かが落ちる音がした。

その音源は、蔵硯からだ。

杖を握っていた蔵硯の人差し指が、根本から取れて地面に転がっていた。

その指はすぐに変色しウジ虫の大群に変わり、しばらくして灰にな

った。

「これは一体どういうことじゃ!?」「ああ、失礼しました。マスター蔵硯。どうやら虫を駆除する際に繋がっていたパスから魔法が感染したようです」

バーサーカーが暢気に説明している間に、蔵硯の体はどんどん崩れて虫になり、灰となっていく。

「貴様！ 使い魔の分際で！ ええい、令呪を持って命じる。今すぐ呪いを解け！」

「残念ですが、呪殺は一度感染したら解くことは出来ません。その命令を実行することは不可能です」

「なんじゃ……」

最後まで言葉を出す前に歪んだ蔵硯の顔が崩れた。

「さて、うつかり（……）マスターを殺してしまった。このままでは、戦争に参加する前に魔力不足で消えてしまうな。さて、どうしたものか」

言っていることは重大だが、わざとらしい表情で棒読みされると、どうしても困っていると言う雰囲気を感じられない。

と、言うかスキル：単独行動が高いんだから現界する分には全然困らないだろ！

やはり、聖杯が欲しいのだろうか。

欲しいに決まっているな。要らないなら、そもそもサーヴァントとして召喚されないはずだ。

「私がマスターに戻りたいのは、山々だが魔術回路の代用をしてい

た刻印虫はさつき死んでしまったし、私ではマスターに成ることは出来ないよ」

とは言え、マスターになったところであのパラメーターで宝具も使えないのでは、勝つことなど不可能だろう。

私のような未熟な魔術師と契約し直すよりも、もっと他の正当な魔術師と契約した方が勝ち目がある。

「『戻りたいのは山々』と言うことは、戻れるなら戻ってもいいと？」

「ああ」

バーサーカーには助けられっぱなしだ。

私に出来るなら、なんでもしよう。

私の願いを叶えたバーサーカーが、聖杯を欲すると言うのなら力になるう。

もっとも、私程度では足手まといにしかないが……

「じゃあ、話は早い」

バーサーカーは頷くと、地面に魔法陣を書き始めた。

書き終わると、懐から小指の先ほどの大きさをした宝石とナイフをスーツの中からとりだした。

「この宝石に血を付けて、魔法陣の中に入れてくれ」

言われた通りにして、血を付けた宝石をバーサーカーに渡した。

バーサーカーはそれを魔法陣の中で飲み込んだ。

すると、魔法陣が淡く光り、私とバーサーカーの間に1枚のカードが現れた。

カードには数字やら方位など色々なことが書いてある。

中でも目を引いたのは、カードの中心で今の表情から想像出来ないような憤怒の表情で、大きな矛を地面に突き立てて仁王立ちしているバーサーカーだった。

「これで契約成立だ。改めて、よろしく。マスター雁夜」

右手の甲に針を刺すような痛みを感じ、確認すると二画の令呪が刻まれていた。

クリスマス番外編『第4次聖杯戦争参戦』

（後書き）

今回は本編の続きになります。

29日から仕事納めなので、出来れば更新頻度を上げたいなーと思っています。

ただ、仕事始めがいつかわからないので、上がるかどうか微妙ですが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9377w/>

子供先生の親友～独走

2011年12月25日17時53分発行